

## 史料紹介 森本州平日記（十）

東京大学大学院  
日本近代政治史ゼミ

はじめに

本年翻刻する森本州平日記は、一九三二（昭和七）年一月一日から三月三十一日までの三か月分の日記となる。これに先立つ年の「史料紹介 森本州平日記」については、紙媒体の『東京大学日本史学研究室紀要』では「森本州平日記（九）」までが掲載されており、また、東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）では「森本州平日記（六）」までが閲覧できるので、ご覧いただきたい（二〇一八年三月一九日確認）。

この日記の書き手である森本州平（一八八五年～一九七二年）が昭和戦前期にあって当主をつとめた森本家は、長野県松尾村（現飯田市新松尾）の旧家であり、森本家に伝来した文書の詳細については、飯田市歴史研究所編『飯田下伊那地域史料現況記録調査報告書Ⅰ 飯田市松尾新井森本家（大森本）文書』（二〇〇八年）、同編『史料で読む

飯田・下伊那の歴史Ⅰ 松尾大森本の家と周辺社会』（二〇〇九年）で確認できる。

本号所載の日記について、その内容の理解のために、比較的詳細な「語句の説明」をつけた。本号収録の時期は、満州事変に関する日中調査のため、国際連盟理事会が日本に派遣した、いわゆるリットン調査団の日本到着時にあたっており、また中国では第一次上海事変が日本側の当初の思惑を超えて軍事的な拡大をみせた時期だった。本事変を契機に中国側は、連盟に対し、満州事変を含めた日中紛争全体を、改めて規約第一〇条（加盟国の領土保全と政治的独立の尊重）と第一五条（仲裁規定）で提訴し直した。一五条での提訴の場合、理事会の過半数の票決により、勧告を載せた報告書を作成することができ（第四項）、紛争当事国の一方の要求があれば連盟総会の場に持ち込むことができた（第九項）。リットン調査団の派遣を決定した、一九三一年二月の理事会決定（理事会は全会一致を原則とする）がなされた時期とは、根本的に異なる対応が可能となった。

筆耕には、大学院生の飯島直樹、吉田ますみ、賀申杰、アン・ジェイク、崎島達矢、佐藤大悟、三村佳緒、章霖、路平、塚原浩太郎、石坂桜、上西晴也、谷川みらい、増田由貴、桑田翔、滝野祐里奈、霍東昆（総合文化研究科修士課程）、服部健太郎（理学研究科 特別研究学生）、学部生の太田知宏、鈴木遼香、渡部亮の諸氏が、語句の説明には、飯島、賀、三村、章、路、塚原、石坂、上西、谷川、桑田、滝野の諸氏があたった。校正段階での原本照合を含め、全体の調整は佐藤大悟が行なった。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体を新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、個人の評価にかかわる問題を含む人名について\*\*\*などにより匿名扱いとした。

最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み翻刻することをお許しくださり、翻刻文について丁寧にご助言を下さった、日記原本所有者で現森本家当主の森本信正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなくお力をお貸しくださる飯田市歴史研究所調査研究員齊藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。（加藤陽子）

一月一日 金曜

晴。結氷せず。起床直に弁天神社、氏神等を参詣す。子供八幡社へ参詣す。

朝十時小学校に拝賀式あり、村内有力者集合しあはれは行きて新年の挨拶をなす。小学校、先生校長未だ決定せず、次席校長代理をつとむ。村長新年の賀詞を述べ、併し不況の繰越と国際問題、思想問題の繰越

にて特別に注意すべき年なるを述べ。

拝賀式終了後、本所に於て組合従業員新年宴会ありて出席し、一場の賀詞と不況の繰越の為本年は特に奮励努力を要すべき年なる事を述べたり。他に四、五の理事も参加して宴を開き、終つて八幡社を参詣して中島へ年賀に立寄り、伍組の初集會に今村峯太郎方に向ふ。伍長を森本晴男に引渡す。本年は祭当番となる。湯沢隆三年賀来訪し、昨冬十二月十二、三日開かれたる座光寺に於ける水戸浪士通過六十六年紀念展覽会の状況に付て聞く。天気平穩晴れ暖にて結氷せず。不況なれとも一般に人気平穩なり。咳之に伴ひて痰出す。

予記 作興會の一転機。銀行の常務を止め家事を見る事。組合の整理、借金整理。

【語句の説明】①森本晴男：一九三〇年に伍組の惣代に任命される。三一年から三二年にかけては新井村の耕地委員を務めた。

②水戸浪士通過六十六年紀念展覽會：一八六四年、朝廷に攘夷を訴えるため天狗党の水戸浪士が伊那を通過した。浪士たちは和田峠付近で高島、松本兩藩と交戦、激戦地となった。展覽會は元県会議員北原源三郎らの発起により、一月二、一三日に座光寺村小学校で行われた水戸浪士通過六十六年記念祭と下伊那郡出身の平田流国学者北原稲雄五〇年祭のことを指す。水戸浪士や勤皇家の遺品展と講演會も開催された。

一月二日 土曜

晴。水はらず。買初なりとて下男朝早く起きて飯田に買物す。充分休養して家居す。老父病氣にて酒を禁止し居りしが、旧臘大雄寺和尚の来訪して酒をすゝめたるより少しつ、飲む事となり、来客あれば出

て来りて飲酒すれば過こしては宜敷からすと思ひ、父のおアイをして  
家居す。年賀の来客多く橋爪和男、牧内良平等も見へたり。其他多く  
の人々来訪したれば其の相手をなし居れば日は暮るなり。寸暇を見て  
中島に与一郎を訪問し、彼か耕地惣代として衆望ある由を聞き、此際  
彼を出さざる方宜敷からんと何とかして止めに行き、義勝も来合せて  
方法を講せしも適當なる方法もなかりし。聞く処によれば猪佐雄の指  
金適中したりと説くものもあり、大石の出る時に泰治と争ひたれば其  
争を匿せんが為に与一郎と泰治とを出すなりと云ふものもありて、或  
は猪佐雄の指金の通り進行せんかと氣つかわれたり。予は中島勘一と  
猪佐雄とを推挙して之れを挙げんと二、三名に話せしも急に於て及ば  
ず。

予記 家居して父をして余り多を飲ましめぬ様する事。

発信 年賀状。

社会の今日 皇軍錦州へ討伐に向ふ。

【語句の説明】①猪佐雄：森本猪佐雄。一九二四年から二五年にかけ

て松尾村新井耕地の耕地委員を務める。そのほか、松尾村常設土木

委員（一九二四～二八年）、村会議員（一九二九～四六年）、松川入

山林組合会議員（一九三二～三六年）を歴任。

②中島勘一：一九二八年から二九年にかけて新井耕地の耕地委員を務  
める。一九三〇年の耕地委員改選では一五票を獲得し四位に終わつ  
ていた。

③皇軍錦州へ討伐に向ふ：当時錦州には張学良率いる東北軍唯一の軍  
事拠点が存在していた。陸軍は錦州制庄を画策し、三一年一二月二  
八日に関東軍が進撃を開始し、年明けの一月三日に錦州無血入城を  
果たした。

一月三日 日曜

快晴無風。凍る。暖き正月なり。風越山ても雪なく遠山のみに雪  
皚々たり。此分にては凍豆腐屋の失敗の年なりなど皆云ふ。朝年賀状  
を書き福神を祭り摺初をなせば芋汁美味なり。石原を訪問す。松阪屋  
の昆布茶を一饌土産とす。石原に鶯かひあり熾に鳴く。暫く話して監  
事の改選時を告げて帰る。耕地祭当番にて午後一時より集会所へ出頭  
す。耕地委員改選投票あり、中島の与一郎56点にて当選、次には丸山  
泰治25点にて当選す。予の目算中島勘一、猪佐雄の目票はづれたり。  
耕地には将来耕地の事を考ふるものなく、徒に投票を興味を以て見る  
のみなり。惣代としては道路問題あり、一流の人を出して之に充てさ  
るべからず。併も猪佐雄等の策動あり、遂に彼の名をなさしむ。塩沢  
治男、光治、幸治等賀問に来る。前沢俊三も来訪す。夕刻龍門寺を訪  
問す（海苔カンを持参）。不在、空しく帰宅す。両新当選の惣代辞退  
したるも聞き入れられず。

椀屋に年賀の訪問して帰れり。

予記 国うみの神代のさまもかくあれや暁かけて雛の声。

一月四日 月曜

晴。銀行に午前十時より支店長会議を召集し置きたるに付、直に銀  
行に出勤す。午前十時よりの支店長会議に出席して、各支店自足自給  
主義を以て将来経営すべしと論断し対支店策の大綱を示す。小池氏も  
立合ひて、彼は政友内閣の出現によつて貨幣価値は下り物価は上る、  
従つて借金の支払には便宜となり生活には苦しくなるべしと説けり。  
次に午後四時より重役会議を開き年度末決算及総会に付て協議し、終  
つて各支店長及本店行員全部と年賀酒を汲みかはして散し、山本へ年

賀に行く。午後八時半山本着すれば既に先着の座光寺北原姉、松尾扉史郎あり、共に四方八方の世間話を夜を深くして話し合へり。山本へ下男久男と下女竹の結婚に付き様子を窺ひたき旨申入れたれば一縷の望あるらし。午前中より多忙にて支店会議に於てもまとまりたる案を作り出席出来ず、只其場当りの演舌の如きものなりし。

【語句の説明】政友内閣の出現によつて貨幣価値は下り物価は上る：浜口雄幸内閣における旧平価での金解禁により、為替相場は人為的に引き上げられていたが、政友会が政権獲得直後、実質上の金輸出再禁止を行つたため、為替相場の下落と物価上昇を招いた。

#### 一月五日 火曜

快晴無風。日本晴れにて暖風なし。朝七時頃起床すれば天に一点の曇なく赤山の松に旭映し清々しき事限りなし。今日は何となく荷物を卸したる如き心地にして伸々したる気分なり。生家の気分は誰にも物語るを得ず、老父健在にて座光寺姉、兄、扉史郎皆嬉々として、不況時に家政の困難あるも此処には風吹きよせず、平和なる家庭に兄弟相集まり四方八方の話、此上もなき楽園なり。座敷の炬燵に茶を喫し居れば日和よく、障紙を開放して門前の山を見つ、あれは心地よし。夕刻帰宅せんとすれば阿知（妹）又来訪して又暫らく話し酒を饗されて、谷イチ子の嫁入の衣類道具の買入や種類等に付ても北原姉指図役となりて予定を製作せり。大略式百円を以て之に充つる由なり。実父にも百十七Bの状況を話し、常務として日勤の出来難き事等も話せり。イチの嫁入に関して伯父等より種々祝儀を贈る事とし、予は桐の二重簞筒を贈る事とし、金拾四円を投して西にて買入れたり。午後九時帰宅すれば勝男、義三等の来訪の話等ありたり。下男久と竹との嫁談（縁

談）まとまりかけたり。

#### 一月六日 水曜

晴。朝少しく結氷したるも温暖にして湿気あり。春三月下旬の如き氣候なり。冬至梅花開きて見頃なり。人々余りに温暖なるに付、前途の氣候を心配す。

午前中吉川芳太郎を訪問し、銀行の事より説き出し常務取締役として今一人加へる事の必要を唱へたるも、却々芳太郎翁直に之に賛成せず世間の見方は如何ならんと云ひて肯せず、予の計画も直に採用せられず。猶組合の監事改選期に付不相変頼むと申込みたるに、老年の故を以て肯せず。然らば其息亮夫をして之に充てしめんと話せしも、それも肯せず。銀行の前途の事のみにて案し居るのみ。予も亦家事の都合上日勤出来ざる旨を告げし。種々話の末吉川は預金者の了解が何時か爆発せんことを怖る。相殺は之をなるべくなし債権債務を少くすること肝要なり。依て銀行より先して之をなすべしとの話あり。放課後小林清次郎来行し組合より借入金に付てグズ／＼云ひ居りしも要を得ず。六日年なりとて行員を早く返らしたり。予も亦帰宅す。

【語句の説明】組合の監事改選：松尾村産業組合（正式名称は松尾信用販売購買利用組合）の監事は理事の業務に対する監査を主務とし、当時は吉川芳太郎・石原茂一が務めていた。

#### 一月七日 木曜

曇雨。午前中北原阿知之助を訪問して作興会に付き話せんとして家を出てしが、橋本屋に行きて木下作太郎の来り、耕地整理の丁張りをなす由に付之に立会、小作人をして来り工事を見せんとせしも、小作

人太次郎、太一共に用事ありて来らず。遂に空しく作次郎を帰さしむ。木下喜吾次、木下文雄、福住文雄等来訪す。父酒を飲み鬱を散せんと試みるもの、如し。飲酒は身体の為よろしからされとも、老年にて他に樂もなければ飲酒を氣に任せて一任せり。午後上飯、銀行へ出勤す。酒井府来行して預金の払戻に付て金田と話あり。予は百十七銀行の将来と預金者心理とを考慮して、酒井に本行の将来に付て并し預金の払戻に付て至急には行届きかねるが近い将来に於て復興すべしと告げたり。放課後野原を訪問し、酒造米の売込に付き話せしも二俵十五円と吹き出せし故、遂に談まとまらず終る。太次郎に途中にて会い彼か来らざる事に付て談し込む。

氣候暖に急ぎ山にも雪なく氣味悪しき迄に暖なり。

予記 父何となく体力衰へる如く思はる。

【語句の説明】金田：金田岩男。百十七銀行副支配人。

一月八日 金曜

晴。信也朝五時上京出発。上諏訪明神へ参詣して行けとの祖母の念願に早朝出発する事とす。朝与一郎、泰治兩人来訪して耕地惣代として就任の挨拶に来る。兩人は三日の耕総代選挙に於て、前者は53、後者は25点を得て当選す。之れには猪佐雄の策動あり。予は此際猪佐雄と勘一とに投せむ。直にそれより上飯して聯合事務所を訪い、下田に作興会決算に付旨をふくめて決算書作製〔成〕に付打合せをなす。後銀行出勤午後一時なり。銀行業務としては目下預金者沈静として此俥に過し得る見通付きたれば、此際現金を安田Bへ返し金利損を軽くする事とす。放課後上柳本家を訪問し、年始を述べ種々村沢氏との醸造酒販売の件、伊那電株の件等につき話し、米を売り込みせんとせしも

駄目なり。加藤へも同様電話にて話せしも十五円を主張せしため駄目となる。八時自動車にて帰宅せり。

朝北原阿智之助を年始訪問、作興会に付て打合せをなす。

予記 不敬事件突発す。新聞には発表なく電話にて聞き、断腸の思あり。幸に朝鮮人なりし由。内閣総辞職せんとせしも、其儀に不及との優詔により本通りとなる。

社会の今日 聖上陸軍始観兵式より還御の際、大不敬事件勃発の由聞及。

【語句の説明】①作興会：下伊那郡国民精神作興会。一九二四年一月に思想善導を目的として発足した。理事長は北原阿智之助、専務幹事には森本州平が就任していた。

②伊那電：一九〇七年、伊那電車軌道会社として創立され、一九年に伊那電気鉄道に改称。恐慌の影響による経済不況で経営収入が減少していた。

③不敬事件：桜田門事件。一月八日、陸軍始観兵式の帰途、桜田門付近において奉拝者から天皇の行列に手榴弾が投げ入れられたが、負傷者はいなかった。犯人の朝鮮人李奉昌は逮捕され、死刑となった。事件後、犬養毅首相以下全閣僚は辞表を提出したが、天皇と元老西園寺公望の意志で全員留任が決まった。

一月九日 土曜

晴。辛ふして結氷し凍豆腐の製造出来たり。大不敬事件の為責を負ひて総辞職せんとしたる政友内閣優詔により元通りなり。併し此の如き不敬事件は到底人力もて阻止すべからず。国体の擁護と国民精神の作興益々必要を感す。組合支所に行き石原、青山、塩沢新九郎等と話

す。人心組合より去ると聞く。不況の際組合を堅実になり、民生をして永々蔓しよらんとする予の決心には微動だもせず、却て前者の放漫経営を心苦しく思ふのみ。郡農会へ青年講習所として貸す事に付ては異議なし。中島源一来りて松尾村青年会協議員として同しくつとめくれよとの事に肯ず。午後聯合事務所に於て百十七B関係の組合集合して対策を協議すと聞き出席す。千円以上の分は之を県の特別融資に肩替りする事に付話まとまる。予は其席に出席して17Bの常務として預金者組合に迷惑をかけたるを謝し、猶少資本を以てしても銀行はやつて行く事及整理案を示さざる事に付了解を求めたり。

終つて作興会に付北原、中原と打合して聖寿の無疆を祈る会合をなす事に決す。又宮島豊治を銀行迄来らしめて話す。中原へ年賀に行きて帰る。

多忙の日なり。

社会の今日 内閣不敬事件の責を負ひ総辭職。優詔下りて元通。

一月十日 日曜

晴。木下作太郎来り、北河原耕地整理地区を丁張りをなす。太次郎来らず。之れか為に小林、中島正親等にてなす。午後上柳緑来訪して話す程に午後四時飯田発にて長野行とせん事を計画し置きたるも水泡に帰し、午後六時出發する事に変更す。上柳緑年賀に來り、予の出席と共に上飯。朝菊太郎、庄平の兩人來り、菊太郎の屋敷として丸山重応の小作し居る畑を貸してくれと云ふ。何れ検分して後の事を約す。増恵、宏を伴ひて吉川医師の診察をうく。宏此頃宵の内に寝汗をかきウナサレタル如き苦しき声を出す。診察の結果未だ病状に表れずと雖も結核性のものなれば氣を付くべし、との事なり。夕刻帰宅。宮沢厚

平來訪す。午後六時上飯銀行にて金田と打合の上出県する事とし独り伊那電にて松本着、浅間の湯に投して靜に出県後の方策をねる。

【語句の説明】①北河原：北河原は松尾村新井にある小字。松川が天竜川に合流する河口の近辺にあり、松川沿岸を走る伊久間街道（県道富田飯田線）が通る。この一帯は大正期から道路改修・堤防新設の問題が存在し、一九二四年、三〇年、三五年に工事が行された。②浅間の湯：浅間温泉。長野県松本市北東部にある温泉。

一月十一日 月曜

晴。松本浅間小柳に泊り朝九時松本より長野行。直に県庁に出勤、途中赤羽九市に会ふ。先づ産業組合課に出頭して、課長杉原氏に北信地方の農村負債整理状況に付て其の範とすべきに足るものありや否やを問ふ。又他の書記とも其話をなす。原幹事長も亦座にあり。奥原主事にも伊那社の件を話し、又県の特別融資の残ありや、銀行にて産組よりの預金の特融肩替りの是非やつてもらい度きを頼む。安達技手より伊那社の積立金取崩し問題にて付ては、現伊那社幹部の態度の宜敷からざる事を告ぐ。県としては、解散の責任を負はざる様にして解散する様しむけるか如く、伊那社積立金取崩に就て安達氏より依頼あり。次に信聯に米倉氏を訪問して負債整理の組合状況を問ひしに、塩川村加納村を指されは、それに行く事とし、且又銀行の特融を融資せられん事を頼む。産業組合より依頼申込ありて致方なしとすれば融資せざる事もなしと。農商課に黒□書記を訪問して特別融資を百十七の方へ回す事を頼む。

公金も合せて融通せられん事を頼みしか、産組の方でなければ駄目たとの事。次に用件は終りたれば、上山田に來り、笹屋に一泊して湯

に浸る。

【語句の説明】①課長杉原氏：杉原定寿。当時は長野県知事官房主事兼内務部産業組合課長。

②原幹事長：原貞治郎。県の産業組合調査会幹事長、国本社伊那支部幹事長などを務めた。

③奥原主事：奥原潔。島根県農学校卒。当時は長野県内務部地方農林主事。のちに産業組合課長を務める。

④伊那社の積立金取崩し問題：下伊那郡二七組合が加入する有限責任下伊那生糸販売組合連合会伊那社では、生糸問屋湧川商店の倒産に伴い、一九三一年三月から六月まで間の生糸売掛代金中五万円が回収困難に陥っていた。州平ら伊那社側は長野県に低利資金貸付による救済を求めたが、県側は五万円の内三万円は伊那社内部の連合会積立金から補填するよう求めていた。

⑤米倉氏：米倉龍也。松本中学、盛岡高等農林学校卒。一九二〇年に長野県産業主事就任。一九三一年には長野県信用組合連合会専務理事に就任し、四一年からは会長を務めた。

#### 一月十二日 火曜

晴雨。戸倉笹屋旅館に宿泊して朝八時に宿を出た。大屋駅に下車して、塩川村に塩川組合を訪問した。大きな田舎の雑貨店の様だ。店にはコム靴や、塩魚や、毛糸や、石鹼イソジンや雑然として並べてある。一方には信用組合の事務所が板壁を隔て、ある。田舎の万やと云ふ格好で組合らしくもない。刺を通して面会を乞ふと、田中と云ふ男が出て来て炬燵で種々説明してくれた。小規模のもので何の見る所もない、貸付金が廿五万で預金が十八万であると云ふ事のみだ。負債の整理として

別に計画を建て、見たが、之れも計画に過ぎない。只組合員をして何とかして此山の様な負債を払つて行くかと云ふ事を感じて居るのみだと云ふ。一組合員貸付最高四千元であり、農村としては無理である事を証明する。二時間計り居て加納村に和組合を訪ふた。専務が出て来て、胡桃栽培によつて負債を済す計画だと云ふ事だ。一組合員に貸付最高六千元だと云ふ。負債も却々多い。事業は沢山やつて居るが、之れも負債整理に付ては案が要するに立つて居ない。胡桃の話聞いて、帰途胡桃の苗を五十銭で八本買って来た。

予記 大屋から篠井で平野、原と合して十二時帰宅した。暖て雨か降つて居た。増沢より年玉あり。矢沢有一より敷島十年玉あり。社会の今日 独逸戦債不払を声明す。

【語句の説明】①塩川組合：長野県小県郡塩川村の産業組合である塩川信用購買販売利用組合。一九三〇年一二月末時点で塩川村民の負債総額は八二万円余あり、内二四万五千円余が組合からの借り入れであった。産業組合関係の負債整理は最優先とされ、一九三一年二月五日には「塩川組合負債整理規定」が制定された。

②加納村に和組合を訪ふた：加納村とは長野県小県郡和（かのう）村のことを指すため、州平は村名表記を誤認していると見られる。和村は大屋駅の北側に位置する。和・海善寺の二つの大字を持ち、一九五六年、東部町に編入。二〇〇四年以降東御市。

③独逸戦債不払を声明す：世界恐慌の影響により、ドイツでは主要銀行が倒産し深刻な信用恐慌に見舞われていた。ドイツでは既に一九三一年に賠償金支払い停止を宣言し、アメリカの援助により一年間の支払い猶予を得ていたが、経済状況は好転せず、一月九日にブリュッセル首相が賠償金不払いを正式に声明した。

一月十三日 水曜

晴。暖し。上柳喜右衛門書画藏品を京都に出品して前沢と共に売る目録着、父より示さる。小林菊太郎屋敷を新川の端に自ら相々貸してくれと懇請せられ、それを検しに行く、丸山重応と交渉して見よと云ふて去る。直に午前十時銀行に出勤す。小池氏来行し居り、悠々せり。監査役会を開く。諸決算書類を検す。現金の検査もなす。重役会を開き、宮沢要治郎を監査役とし、福沢憲和を取締役に昇任の件は、福沢氏昇任覚束なし。予は金田を取締役に推薦せるも、頭取、吉川共に此際は時機に非すと反対し、予は家庭の事情より父病気なれば日勤六ヶ敷と云ふ。頭取曰く、此際に止める等言ふものは犬に劣る、人間に非すと難す。此言耳底に浸み入れり。怒気肚裡に迫りたれとも、ケンカとなりてはよろしからずと胸中に秘して、其場は収まる。吉川氏云く、平取締役にさへ此際止まるに、執行重役に於て逃けるとは……と云ふ。他の重役も亦之に和して笑ひて此場面は治りたり。併し予の胸中には頭取の言残りて消えず。西上柳に年賀に行きて其由を告げたり。上柳喜右衛門所蔵幅の売立の為京都に上洛すとて中座す。

予記 銀行の重役会に日勤不可能を持出す。金田の取締役抜擢も同様。【語句の説明】①上柳喜右衛門：一八九五年生、長野県出身。名は多賀治。上柳家は酒造業を営み、長野県多額納税者だった。この当時は百十七銀行取締役、蕉梧堂ホテル監査役。

②宮沢要治郎：宮沢要二郎のことか。百十七銀行赤穂支店長。

③福沢憲和：一八八八年、長野県人福沢三郎の長男として生まれる。

福沢家は県下有数の資産家。当時は百十七銀行監査役、長野県多額納税者だった。

一月十四日 木曜

快晴。朝庄太郎と菊太郎が来訪して、曾て屋敷として丸山重応の小作北河原土地を貸地を乞ひ度旨話ありし故、土地を檢分して貸してもよけれども重応の許可をうくべしと申伝へたるに、先方へ相談したる処肯せず。如何にすべきやに付話ありたるも、今一回交渉すべしと申伝へたり。猶、他に今村峯太郎の旧家を買ひ、中島〔屋号〕に相談して貸地を乞ふ事としたら如何と相談してやる。次に組合支所に行きたるも、青山不在に付、井深に試験方法改正立案すべき様申渡して上飯、聯合事務所に出頭して下田と作興会決算（五年度）に付計算をなしたり。誤算ありて容易に判明せず、依つて終日銀行を休みて作興会の用務をなす。銀行に出勤すれば既に閉して居らず、直に帰宅す。矢沢有一より年玉として煙草敷島十ヶを贈られたり。増沢商店より菓子同上。聯合事務所小西町長来りて、彼か幸徳事件に於て松本警察署長として功を建てたる話をなし、一時間計り彼より当時の状況に付て話を聞く。作興会の聖寿祈願祭に彼と徳永両氏を聘して、其当時の模様を聞く事とせる事に付ては、事秘密を要するを以て公然話す事を得ずとの事なりしも、当時の功名談と苦心談をなせり。

発信 矢沢有一。

【語句の説明】小西町長：小西吉太郎。飯田町長を務めたのち、この当時は名誉町長になっていた。

一月十五日 金曜

晴。午前十時銀行へ出勤す。銀行の将来如何に成行くべきかに付ては大に憂慮せり。併し此の如くなりたるは吾が行蹟にあらすして、以前より頭取としても金融業者としての経綸あるにあらず、只俸給を得

て頭取としての栄位を保たんとしたる野心のありて椅子に付きたるのみ。今日ある決して偶然にあらず。上伊那地方へ支店を徒に多く出過ぎたる事、伊那電に關係を深くし過ぎたる事、片桐事件其他銀行の不利なる事のみ多し。財界の極度の不況に加ふるに銀行の今日の不始末、此の際引退して組合の為に尽さんか、或は此の際身を挺して銀行業に邁進せんかと種々考へて見たが、遂に銀行業の如きは予の畢世の業に非すと断して、何とかして銀行より回避せんと極力つとむ。午後一時より聯合事務所て作興会幹部会あり出席し「如何にして国民精神を作興すべきか」に付て相談し予算の大体方針と建国祭の仕方につて協議せり。来るべき聖寿の祈願祭に付ては終了後仙寿楼に於て一円会費にて夕食する事とし、小西、徳永を招く事とせり。

夜、原直治郎、千田、下田の三名年賀の為来訪せり。

予記 如何にして此疲退せる国民精神を作興するかは、夢にも忘る、能はざる所、昨年年末樋口、麦島、中島等の「満蒙より手を引け」の運動の如きもの表はるゝのは国民精神の作興の愈々急するを覚ゆ。社会の今日 古賀聯隊錦西に於て匪賊の為全滅の報伝はる。

【語句の説明】①片桐事件：一九三〇年一二月、片桐亭次郎が百十七銀行から担保金一九万円相当を盗んだ事件。翌三一年六月には懲役一年二カ月の判決が下された。

②古賀聯隊錦西に於て匪賊の為全滅の報：古賀聯隊とは古賀伝太郎騎兵中佐（一八八〇年～一九三二年、陸士一五期、死後大佐進級）が指揮した騎兵第二七連隊を指す。連隊は満州事変勃発に伴い錦西に駐屯していた。一月九日、古賀連隊長以下六〇騎は匪賊掃討のため錦西を発つが、途中で敵軍の反撃に遭い戦死した。古賀連隊の最期は満州事変における代表的な美談として伝えられ、多くの映画や音

楽作品が作成された。

一月十六日 土曜

晴曇。銀行へ出勤する前、聯合事務所に行き作興会予算を作成せり。原幹事長にも会い、予算の件につき打合せたり。本年は青年幹部講習を止め、之に代ふるに映画により（殊に戦争映画により）志気を鼓舞する事、国民精神の緊張を計る事とせり。昨年比して一割の予算減を行へり。午前十時銀行出勤す。信産銀行支払準備の豊富なる事を示して一般公衆に訴へたり。銀行にては大平頭取上京し不在に付、事務を見る。常に現業に対する書類の点検と、行員賞与金分配とに付て計画せり。又、原田に示して来る総会に於ける頭取より開会の辞に次て、銀行の支払猶予を求むるに付て、之に至る迄の原因、経過、現在、将来に対する方針等につきて説明の要旨を記載せられたき旨を頼む。放課後両支配人と相談したり。去る十四日同盟会に於て小林勸銀の開会の辞に付、当行に対し不埒の言ありしに付、金田之を憤怒し、松沢茂雄に相談して之に対策を講ずる事とせり。三原屋、前沢俊三の両氏を年賀の為訪問して、夜九時帰宅せり。

予記 牧内一に織田娘の写真を送る。竹村順一來行、凍豆腐組合の器具買入方話あり。

発信 牧内一。

【語句の説明】①原田：原田増次郎。一九二八年から百十七銀行支配人を務める。

②信産銀行：一八九七年、飯田町に創立。一九四〇年、百十七銀行・伊那銀行と合併し飯田銀行となる。

③小林勸銀：勸銀とは日本勸業銀行のこと。一八九七年に殖産興業の

ための産業金融機関として、日本勧業銀行法により設立された特殊銀行。一九二〇年の恐慌以降、同行と地方の農工銀行との合併が開された。長野県では一九三〇年二月、同行と長野農工銀行と合併した。小林は小林暢（一八七九〜一九三五年）のことで、長野農工銀行頭取や六十三銀行頭取を歴任し、一九二五年には貴族院議員に選出されていた。この当時は八十二銀行初代頭取を務めていた。

④松沢茂雄：六十三銀行飯田支店長。一九三一年八月、第十九銀行との合併により八十二銀行が新設されると同銀行の飯田支店長に就任した（一九三八年まで在任）。その後は飯田市議会副議長を務めた（一九四二〜四四年）。

一月十七日 日曜

快晴。朝父と茶を喫しつ、北河原耕地整理、米売等打合せたり。午前十時組合へ出向す。本所に行き青山と諸事打合をなす。総会、決算、理事会等、年度末の諸事打合せたり。諸事吾が志と違ふ事多けれども、一步一步踏みしめてあせらず悠然として明かに世を渡るより外、致し方なし。近來万事にあせる一方にて、作興会、銀行、組合等、種々の事業に自ら中心となりて仕事を拵け居るを以て、考ふれば考ふる程重責なり。自ら此の責任の重きに厭になる事多し。組合にては、青山に信濃胡桃の苗を贈る事等話をせり。組合も木下房吉に、信用部貸付金多くして、支払能力の如何により甲乙丙の三段に分けて区分を作れと申渡せり。信用部の貸付の金利の未収入なるもの一万三千円に及び、農家の負債村内にて百万円はあるべし。此の負債を如何に整理すべきかは村の存敗〔廢〕の岐路なるべし。負債整理を以て組合の大体方針とする事を総会に於て決定する事とせり。青山に北信和組合、塩川組

合の負債整理の状況に付て話せり。今村盈夫の子供三才にて死亡し、久を差遣せり。

【語句の説明】①青山：青山金三郎。村産業組合専務理事。一九三四年から州平に代わつて産業組合長。

②北信和組合：和村の産業組合である和信用販売購買組合のこと。一九三〇年末時点で和村民の負債総額は八〇万円余、一戸当たり千三百四〇円で、四八万円が組合からの借り入れであった。和村組合では、産業組合中央金庫に長期低利資金の融通を求めるとともに、クルミ栽培を奨励してその利益による元利償還を目指していた。

一月十八日 月曜

快晴。凍豆腐結氷したるべし。本年中の初寒気なり。朝、太次郎、正親、小林、藤太、幸治等来り、北河原耕地整理の話なす。其要旨は、上記小作人等にて請負ひて整理工事をなすや否や、若しするとせば何程位にてなすやと問ひたるに、水利の不便なる事、整理後の年貢に付て聞きたるを以て、現今坪三合四勺なるを以て、三ヶ年間は其俵、其後は作柄を見て多少の増額は止むを得ざるべしと話す。正親、小林等共に工事になれず危ふみ居れり。幸治には田畑との交換地及交換交渉等の口キ、を頼み置けり。松島藤太郎は爾來三ヶ年計り年貢を納入せず。依て工事をなすも其方には貸与出来ず。又如何にして滞納の年貢を支払はんとするかとつめよれば、彼今日の糊口にも困るなりとて何の腹案もなく、然らばタゞにて小作に付する事も出来ず、彼の横着を責めて明後日の夜を再会と約し別れたり。午前〔後〕二時上飯、銀行を断りて作興会の聖上御無事祈願祭に出席す。幸徳秋水事件後二三年なり。小西、徳永等当時の殊勲者あり。北原会長の話の後に、小西

氏秘密なりと前提して、宮下太吉を取押へて彼の重大事件の端緒を得たる話あり。夜に入りて帰る。桜井寅治郎署長送別会あり。丸岡屋幸治に胡桃苗一本贈る。

社会の今日 民政党議会は解散になるべしと予想せらる。

【語句の説明】 幸徳秋水事件…大逆事件。一九一〇年、明治天皇暗殺を計画したとして幸徳秋水ら社会主義者二四名が検挙された。宮下太吉は長野県明科製造所の職工で、菅野スガらと共に爆裂弾を製造していた。当時松本警察署長だった小西吉太郎がこの事実を把握し、宮下らの検挙を指揮した。これを端緒として幸徳らも検挙、大逆罪が適用され幸徳ら一二名に死刑判決が下された。

#### 一月十九日 火曜

快晴。午前中銀行へ出勤せしに、午前十一時半の電車にて、赤穂福沢憲和妻数日前腸臓病にて妊娠中死去せしに付、之れか葬式あり。会葬の為、金田と二人にて出発す。途中太田両氏と会す。午後三時終り、途中下車して宮沢弼に年賀に行く。年玉として鯖一本を贈る。夜八時帰宅。

松島藤太郎と約して会見する事とせしも来らず。彼の不誠意にくむべし。此日快晴にて心地よろしかりしか、咳と痰〔痰〕出で、痰〔痰〕は肺に故障あるやに思はれたり。

#### 一月二十日 水曜

快晴。朝九時聯合事務所に出頭、町村長会あり。作興会予算に付承認を乞ふの日なりしか為、原幹事長と打合の為出張せしも、不在に付直に銀行出勤。吉川芳太郎来行し、佐久銀行塩川氏と頭取との交渉に

付話ありたり。次で午後頭取また出勤せず、聯合事務所に作興会予算決算、町村長会承認に付き出席す。作興会に付ては、頭取予に退任を勧告ありたるも、予は自ら作りたる会なれば退任せずとガンバル。午後三時、町村長会に於ては小西町長、北原会長に代り議長となり、異議なく決定せり。予は青年幹部講習に付説明せり。原幹事長は予算の大略に付て説明す。それより先、会開かる、前に当て、山本村長を町村長の幹事会に招きて、負担金出金方を一同にて頼み置き、山本村長も何とかせんと云ふ。予算にはありしも、更正予算にて省略したるなりと云ふ。併し、思想問題の八釜敷き折柄、是非出金せられたしと迫る。終つて自動車にて直に組合役員会に出席、年度末決算に関する会議を開き、決算に付田中始め他の理事は動産不動産器械銷却一百万円を少しくちぢめて（一割減）一分の配当をした方かよいと主張し、他の理事全部之に賛成し、予と青山と江塚位は組合の堅実を理由として之に賛せざりしか、結局之を認め一分の配当とし、従つて銷却を7%として剰余金処分案を造りたり。

社会の今日 議会解散説多し。

【語句の説明】 ①佐久銀行…一八八一年五月、長野県佐久地方で阿部万五郎ら地元有力者が設立した私立銀行。昭和初期に入ると不況の影響で資産内容が悪化し預金が停滞するようになり、一九三一年四月には支払い制限を発表した。その後、貸金の整理回収や一部店舗の廃止などにより業務縮小、経費節減に努めた。一九四三年二月、八十二銀行に営業権を譲渡して解散した。

②山本村長…下伊那郡山本村の河井牛一郎村長（一八七一〜一九五〇年）。山本村箱川に生まれ、箱川区長・山本村助役・村会議員等を経て一九三〇年から一九三四年にかけて村長を務めた。

一月二十一日 木曜

晴。暖気にて結氷なし。快晴の日続く。寒中とも思はれぬ三月彼岸の陽気なり。何となく変調の陽気に却て心窃に気味悪し。銀行總會前にて銀行のみへ出勤す。總會の対策をねり原田支配人をして總會に於ける頭取の銀行株主に対する開会の辞をやらしむ。併して其如何なる質問を株主よりなさるゝかに付き研究す。然も何事も特に言明すべきものなく信用上秘する事のみなり。予は唯美辭麗句を併へたるのみなる事を批評せり。又行員賞与を包み、万事株主總會の用意出来て夜に入りて帰宅。

銀行に対する世論区々として預金を買ひ集むるブローカ出現し銀行の将来を悪口するものあり、又頭取其他予等の不熱心と唱ふるものあり。預金者恟々たり。真に銀行の将来を思へば、転た恐ろしきものなり。又銀行家として金は幾らでもある様に見られ、人の財を搾取する最もいむべき業なり。一日も早く斯の如き業より脚を洗はんと思ふ。

予記 議會解散と同時に立候補談議に出づ。  
社会の今日 議會解散。

【語句の説明】 議會解散…少数与党政友会を背景に成立した犬養内閣は、勢力挽回を期して第六〇回議會を冒頭解散した。二月二〇日に行われた総選挙は政友会の圧勝に終わった。

一月二十二日 金曜

快晴。總會の日なり。午前九時出行す。午前十時より支店長會議を開き万事支店の業務に付訓示す。予は其席に付かず頭取及金田之に参加せり。總會は午後一時半開かれ株主の集まるもの約二百名、稀に見る盛況なり。頭取の開会の辞に次て橋爪より質問あり。次て太田時次

郎より毒舌の煽動的攻撃演舌あり、検査役を選任すべしと論す。之に對して島岡三造氏より反対演舌あり。拍手も屢々起りて、議場殺氣立たんとしたが、太田の説も頭取の巧妙なる作戦によりて消滅し事なきを得たり。一時太田の攻撃演舌の結果は如何になるかも氣遣はれたり。重役留任の説も無事通過し遂に總會は予定の通り終了す。却て株主及預金者に安心を与へたり。其の頭取の決心は自己の私財のみならず身命を賭して此行の為に尽すと云ひたる言なり。

終了後重役会を開き、重役の留任を議し頭取再選となりたるも遂に予は黙殺して予の常務の事に及はず。前言の通りとし何処迄も常務を辞する決心をなし、不日病氣と称して出勤せざる事とする事に決す。銀行業の如きイヤな業はなし。正親來り耕地整理を延はしてくれと申出す。併し決行の旨を告ぐ。中原が肺炎にて病むを見舞ひたり。

一月二十三日 土曜

雨。炬燵等不用位に暖なり。組合決算期なれば出勤す。支所にて井深に会ひ、彼か一月一配〔杯〕にて辞任し度旨申出ありたる由に付、彼に外交的辞令を以て留任を勧告したり。又江塚に話せと申す。次に本所行き報告書に付て一通り目を通す。吉川會計來組し居り決算のテシ〔顛〕末剩余金処分案に付て話す。午後青山來組し種々打合の上上飯す。小林岩重の葬式あり之を弔ふ。会葬者雨の中を待つ。長久寺に柩を送りて帰途大雄寺に行き年詞を述べ。閑樓和尚の病床を見舞ふ。和尚顔色漸々青ざめ稍ムクミ〔浮腫み〕たる様に見ゆ。午後六時帰宅す。

暖にして心地悪しき位なり。

【語句の説明】 ①長久寺…飯田町（現・飯田市諏訪町）にある臨濟宗

妙心寺派の寺院。

②大雄寺：飯田町（現・飯田市大王路）にある臨濟宗妙心寺派の寺院。

一月二十四日 日曜

〔記述なし〕

一月二十五日 月曜

晴。組合に惣代会前にて種々の用事あれば本所に行く。監事も来組しくれ監査ある筈なれば朝十時頃本所行、万事打合の午後三時半上飯す。自宅より電話を以て信也病気なればとて電報来りたり。依て直に帰宅すべしとの事で、銀行の仕事捨て、直に帰宅す。電報に盲腸炎にて泉橋病院入院の旨報告あり。夜行にて増恵と共に出発す。橋本屋にて東京泉橋病院へ架電したるに、入院したる事は知らず未だ〔以下記述なし〕

【語句の説明】東京泉橋病院：神田区和泉町の泉橋慈善病院。貧困層に対する治療を目的として、三井家の寄附を基に一九〇六年に設立された三井慈善病院をその前身とする。一九一九年泉橋慈善病院に改称。

一月二十六日 火曜

晴。朝六時着京、直に駿台荘に入る。一時休憩して直に自動車を馳せて泉橋病院に行く。午前八時なり。患者多く来りて待合室沢山の人なり。何となく普通の病院とは趣を異にすと思ひ、草履もなければ足袋はだしにて待合室に入れば、廊下にも待合室内も朦々たる中に多数の患者あり。案内所も案内人もなければ如何にせんかとウロ／＼して

居れば信陽舎の学生三人来り、直に信也の病室に案内せらる。併して曰く原勇三博士に頼みて直にコンナ所に入院せしめしが如何にすべきと詫びる様に云ふ。予は学生諸氏に礼を言ひて原博士の来診を待つ。

十時頃来り未だ手術前なれども如何にすべきやと問はれし故、付添し得る病院に転し度旨申陳れば、原博士然らば「予の友人にて前田病院へ案内紹介せん」との事に一任して、正午寝台車にて赤坂見附前田病院に入院す。学生水野氏付添ひて転院す。午後三時半原勇三来診しくれ前田博士と共に手術すべきものなりと断せられたれば直に手術する事とす。信也青まず元気なり。遂〔に〕午後五時手術し盲腸を除却す。

【語句の説明】①原勇三博士：外科医。一八八八年長野県に生まれ、一九一六年東京帝国大学を卒業。一九二四年医学博士。一九三二年当時泉橋慈善病院外科部長、東京帝国大学助教授。

②前田病院：前田外科病院。一九二七年、前田友助博士により東京赤坂に開設された。前田友助（一八八七～一九七五年）は愛知県出身の外科医で、東京帝国大学卒。一九二二年医学博士。大正期には慶応義塾大学整形外科教授を務める。戦後は日本外科学会名誉会長などを歴任。

一月二十七日 水曜

晴。病院生活何の用事もなく、銀行の苦況も忘れれば平靜無事なる日を送る。信也手術後稍発熱し三十八度あり、水も飲むを得ず。横臥せるを見守るのみ。看護婦蒲沢なるもの経験もあり親切にてよき看護婦なるもの、如し。茶の道具、其他日用品等を一木通に買に行き、盆、コップ等買ひ帰る。信也は元気なるも昨夜は殆んど眠れなかつた云々訴ふ。午後五時頃原博士来訪し診察しくれたり。病院にては別に

なす事もなければ病室が天下にて、病院の窓より外を眺め等して過すのみ。去りとて読書も多くなすを得ず。東京日々新聞をとりて読む事とせり。

一月二十八日 木曜

快晴。病院の朝室内にて冷水摩擦せり。病院は水の便、手洗等便にして室内各々設備あり。午前中増恵を伴ひて一本通りに買物に出かけピン、手拭、石鹸等日用品買物して帰る。午後日本新聞社に綾川武治氏を訪問し、母堂の死去に付て弔問し、香奠金一円及古露柿一箱を贈呈す。綾川氏郷里埼玉より立候補をなす由なり。但し政友会より立つとすれば資金等には便あるも友人に対して勤労党の立場より困難あり、又若し勤労党として立てば資金に困難し、中立とするも既成政党より鉄撃せらる。如何すべきか大に去就に困り居らし。共衆俱樂部に立寄りて某家売立をのぞく。安き品物陳列あり。欲しきもの沢山あり。銀座デパートをヒヤカシて帰院すれば木下勝男来訪し居り、彼と伴ひて一本通りにて晩酌をくみ、再び帰院して彼の見送をうけて新宿より夜行立ちて組合惣代会に臨むべく帰途に付く。

予記 上海事件益々深く大となる。軍艦派遣、陸戦隊上陸し、大陸的戦争始まらんとす。

【語句の説明】①日本新聞社：藤森勇の主催する日刊紙。一九二五年五月創刊。

②綾川武治：一八九一〜一九六六年。日本新聞社編集局長の職を辞して郷里埼玉二区より無所属・中立で立候補したが、選挙中より劣勢を伝えられ、結果的に落選した。

③勤労党：愛国勤労党。一九三〇年二月一日に結成された反資本主

義的性格を有する革新的政党。同党南信支部は一九三二年八月二十七日に結成、同九月の長野県会議員選挙では中原謹司を出馬・当選させていた。

④共衆俱樂部：共衆美術俱樂部。諸家所蔵美術品の売立会や展覧会等の主催を行っていた。

⑤上海事件：第一次上海事変。一九三二年一月二八日から三月三日にかけて戦われた日本軍と中華民国軍の衝突。九月一八日の満州事変以降、中国では日貨ボイコット運動が展開され、特に上海は中国最大の貿易港であり排日運動の中心地となっていた。一月一八日、上海共同租界で日本人僧侶が中国人に襲撃され死亡する事件が起こったことを機に、日本海軍陸戦隊が出動し中国軍と衝突。中国軍の抵抗に海軍陸戦隊のみでは対応できず、犬養内閣は二月二日、陸軍部隊（第二四混成旅団・第九師団）の派兵を決定。一六日には上海地域への揚陸を完了し、二〇日、二五日、三月一日の三回にわたって総攻撃を行い、三月三日、中国軍が総退却し停戦となった。

一月二十九日 金曜

快晴。夜行。朝八時半組合本所着。直に総会の準備に入る。午前九時より惣代会を催し、予定の通り別に腹案もなかりしが議事終了。百十七銀行を取引銀行とする点に付ては或は異論出でかねまじくとも考へしも、遂に別段の事もなく仮掛金に関しては繰糸機械代なる事及其の収入に付ては努力する旨を答へて置けり。他の問題は別に異論もなく通過し、監事も留任と決し、信用評定委員は廿名を改選する事となり、之又何の風波もなく治る。懇談中工場統一問題惣代側より出て塩沢新九郎、高橋文五郎等より主唱せらる。具体的案を作るに至らずし

て終る。午後六時帰宅して信也病氣及手術後の良経過に付て両親に報告し、両親も安堵せり。下男、久男に下女タケを配する相談をなす。彼も別に一個人としては異議なき様子なり。

社会の今日 上海方面日支衝突、海軍活動。

【語句の説明】①工場統一問題：松尾村組合は第一・第二の二つの製糸工場を持っており、その統一が提案された。工場統一案は前向きに検討されたが、三月二四日には困難との結論に至ったようである。一九三四年に伊那社を改組して天龍社が結成されると、松尾村組合製糸工場は閉鎖された。

②塩沢新九郎：一九三二年当時、松尾村水城耕地の耕地委員（一九二〇～三三年）。その他、元村会議員（一九〇七～三三年）、松川入山林組合会議員（一九〇八～二八年）、学務委員（一九一二～二二年）を務めた。

③高橋文五郎：一九三二年当時、松尾村明耕地の耕地委員（一九三二～三三年）。のち同村学務委員（一九三四～三七年）、常設土木委員（一九三七～四二年）を歴任した。

一月三十日 土曜

快晴。暖にて手袋等は無用なり。快晴の日続く。午前中父と家事に付て打合せり。八幡橋木線改修工事の相談出来たり。始めは旧道を改修する予定なりしも、之を中島安一の処より椀屋の南より東に出て旧道と合する事となる。北河原耕地整理中島正親の申出により本年十月迄延期を許す。下男久男と下女タケノとの嫁談に付て等の打合をなす。午後より竜門寺に行き、廿六日の無門会の相談如何になりしかを問ふて三月十日より第十回接心会を開く事と決す。次て吉川芳太郎を訪問

し、監事として留任と決したるに付何卒今一回だけ承認せられたしと申込む。芳太郎之を拒みたるも強いて御願すとて辞去せり。次て組合に行き青山専務と総代会決議録に付て又書記等の賞与金に付て其割付方法を決して、夜に入り退出し帰宅。敏子来訪し居り話す。

順太郎娘祝儀にて母召宴に行く事となり仕度す。予も亦山本行仕度せり。

予記 人生の行路と予の将来に関して一定の方針立ちて進むを要す。発信 原勇三。

社会の今日 上海交戦状態となる。

【語句の説明】接心会：一定の期間不斷に坐禅をする坐禅会のこと。禅門における修行の一種。

一月三十一日 日曜

快晴。順太郎娘の嫁入の召宴には母出席し、予は山本へ、〔熊〕谷イチ田中一郎へ嫁したるに付（廿五日）、其の聲〔婿〕入として一郎及前沢明文と新婦来訪の由にて其相伴として召かれ、朝仕度をして山本行。イチ祝儀には桐の重筆筒一荷を贈れり。午前十一時半山本へ行けば席史郎、北原姉、あち等来り居り、清水の夫人も招かれ来る。千章、信作は不参なり。次て午後二時頃新習来り、予は之れか接待役となる。午後四時頃より酒宴に入り、前沢とも南洋の躍りをなす。酔ふ程に酔態を演じたり。午後九時頃解散となり客散す。〔熊〕谷イチの新嫁振田舎のオサンドンの如し。兄弟和氣藹々裡に老父も出て来りて接待す。兄酔いて歌ふ。炬辺迄も行きて飲む。山本へ一泊す。浮世の風塵、銀行の苦況をも脱するを得たり。社会の今日 上海事件英米の抗議出す。

二月一日 月曜

快晴。山本へ一泊して、朝悠々兄弟打揃ふて喫茶し長閑なる時間を過す。銀行より電話来りて、帰行する様清水に伝言あり、直に出行する旨答へたり。兄弟打揃ふての閑談悠々時を過せば、浮世の外にて世俗の事を忘る。午前中玉置勝人の来訪する様手紙にて申送りしか、不在と見へて来訪せず。空しく午後飯田に出て、銀行へ出勤す。銀行へは出勤したるも数日来行務を忘却したれば手に付かず、行員の淘汰の原案作成にいそしむ。午後五時頃吉野来行し、勤労党として立候補をなさしむべく、中原を推挙したる旨を告げ、本部が日本国民社会党として他を合併して拡大して出直すべき事等話あり。昨日の黨員の会合には参加する事を得ざりし事、予の立場を説明して、予が今回の選挙に顔を出す事の不可能なる旨を吉野に告ぐ。放課後大平頭取の御祝儀の金を以て、姫城館に於て夕食をとる事とし、予も賛成して之に合す。姫城館にて夕食をとりて帰宅せり。

予記 政友平野桑四郎立候補し、民政は北原は辞し、遠山は衆が推さず、勤労党は中原を推す事としたるも決せず。

【語句の説明】①日本国民社会党：下中弥三郎が結党を目指した政党。国家社会主義者と革新的国家主義者の合同を試みたが、結党には至らなかつた。

②政友平野桑四郎立候補し、民政は北原は辞し、遠山は衆が推さず、勤労党は中原を推す：下伊那郡からは前回選挙で次点だった政友会・平野桑四郎（伍和村生）がいち早く立候補を表明し、民政党では現職の北原阿智之助（上郷村）が家庭の事情で立候補を辞退していた。代わって下伊那民政クラブ幹事の遠山方景が起つこととなったが、遠山は直前の県議選で落選しており、そのためか輸入候補の

擁立が模索されていた。中原謹司は立候補を要望されていたが、病気のため出馬をためらっていた。

二月二日 火曜

曇雨。銀行出勤。午前中行員異動の計画を立て重役会をなす事とし、午後組合信用評定委員会あり出席す。信用程度に付ては、其低下をなし持分と永安、利差の二貯金の合計額を以て程度とする事を、原案を異議なく承認せり。終つて直に再上飯、出行す。宮沢赤穂支店長居合せて、行員の退職、中沢支店合併の件につき彼の意見を問ひたるに、二者共同感にて其他事務を打合して夕に及ふ。仙寿楼に於て産組部会の慰労会あり。組合関係の人々来りて、三十名計り大に歓談をなして去る。午後九時帰宅。

政友平野桑四郎立つ、民政は未決、愛勤は中原を推す事。

此日文星堂ホールに勤労党大会ありたるも予は出席せず。本部より神永氏来飯したる由なり。又南信支部としては党の名称は保存する事、其他は大同合〔合同〕異議なしと本部に申込みたる由なり。

【語句の説明】①信用評定委員会：松尾信用販売購買利用組合の信用部が行つた組合員への資金貸与に際して、貸与対象者の審査を行う委員会。信用程度表を作成し、組合員の資産状態などを考慮して信用程度を評決していた。

②利差：資産運用による実際利回りと予定利率との差のことを指す。利回りが予定利率より高い場合は利差益、逆の場合は利差損となる。

二月三日 水曜

曇小雨、晴。組合に郡農会主催にて農村青年幹部講習会あり、其模

様を見んと組合に行く。是より先、太次郎来訪し、北河原耕地整理を請負ひて仕事をしたしと申込あり。依て第一区は此際整理に着手する事とし、第二区中初太郎小作分は彼が春は出来ないと云ふので其の乞を容れて十月とする事。小林太一倅も来り、太次郎と合同して整理に手伝ふと云ふ。太次郎に見積書を出さしむる事とす。組合にて郡農会主催の講習会に出席したる玉置勝人に会ふ。又講師杉本にも面会せり。午後二時上飯す。小池、岡部来行し居り、支店閉鎖に付き又行員淘汰等につきて意見を問ふ。吉野福一來行し、勤労党にて中原を病中にも不拘、推し立て、代議士選挙に宣伝戦とし、当落は眼中に置かず、決戦する由を聞く。又昨日座光寺と話したる、「予が有力者の糾合の主体となる事は」断然謝絶す。吉野は更に予に金を出さしむる口吻を以て迫りたり、予之を難す。放課後タルマ屋に神永氏を訪い、勤労党が国民社会党として解体の上合同する事に付ては、予は反対の意見を述べ。

発信 宮沢彌。下男を年一五〇円位にて頼む。

社会の今日 上海英米よりも出兵し大戦乱となり、生糸不売。

【語句の説明】①農村青年幹部講習会…二月三日から五日にかけて開催され、下伊那郡下各村から百余名が参加した。最終日の五日夜には、青年の農村観や思想方面の動きを知るべく別途農村青年講習会が開かれた。

②吉野福一…龍江村の教員。森本州平らと共に猶興社の設立に関与していた。

二月四日 木曜

晴。朝太次郎、太一の倅来訪し、林延司なるものを同伴し来り、北

河原耕地整理に林延司をして当らしむる事と志たれば宜敷たのむとの事なり。依て現地に行きて仕様を示し、太次郎、太一兩人を請負人とし、其下請をして延司になさしむる事とし、藤太に会いて、埋立地ならし仕事をなすに付承知すべき旨を申渡す。藤太貧困を告げて悪化し居り、勝手にせよと云ふ態度なり。依て耕地は貸してやるも、汝が来訪して意志の疎通を計らざりしは誠意なきものと認む、兎に角自ら引受けて工事手伝すべしと命したり。父は藤太の不誠意を憤り、遮二無二耕地整理をなして彼より小作地をとり上げんと主張せしも、予は之をなだめて彼をして工事に手伝しめんとす。話して上飯す。小池氏来飯し居り、銀行の貸付の検査を行ふ。藤太との話は面白からざる話なり。夜久男を呼びて、下男久男、タケノを嫁に貰ひては如何と口をき、しに、彼曰く両親に相談せしに諾を得たれはとの事に、下女タケノを呼び出して其話をなせしに、本人も大喜にて、当人同志は出来たるも、越後親元の意志を問合はずべく、手紙を出す。

予記 午後七時過タルマ屋にて神永氏と会ふ。飯田駅に送る。

社会の今日 上海事件拡大し株、生糸等下る。

二月五日 金曜

晴。朝丸岡屋来訪して、八ヶ島蛇籠竣工に付報告あり。工事金五十円計り余りたり。尚其他を合して八十円計りの残余ある旨報告をうけたり。北河原耕地整理に関し今日より工事を始むる由に付、行きて見るに延司七名来り工事を始めたり。藤太にも会いて、工事手伝に出頭すべき由を告げ、尚将来小作地を借りたければ、出て、手伝ふべしと命す。彼は悪化し他に逃出さんかとも思はる、旨申居れり。

午前十時半上飯し、銀行にて又検査を執行す。村沢□一郎番頭来行

して、上伊那Bへ入担せしめたる事に付て詰問したるに、参内中に喋々と申立て、勝手の主張のみ申去る。組合に郡農会の講習に付、市瀬来りて満洲談ある筈なるも行かず。

北河原耕整に付耕地内のものを使役してくれぬとてグス／＼云ふものありと聞く。之れ馬等の宣伝なるべし。

発信 越後小野塚兵一。

〃 静野要造。

二月六日 土曜

晴。北河原耕地整理を見分し行く。木下作太郎来り実地を見て搦上の事に付きて談し、金二十円を搦上賃として増払する事となり却て損を招きたり。又藤太に会いて左の通り話す。小作せんとせは此際率先工事に出動し猶引続小作地を借入のこと、若し之を肯せずして他人に工事をなさしめは別に低利資金恩恵に浴せざる事往々あり。午後重役会を開きて支店合併に付て話せし。終了せんとする時小生の常務問題に入り、予は家事の都合上て余り几帳面に出動出来すとどなりたり。之れは予か余りに正直に大平に反対したるものにて最も不出来の事柄なり。

吉川氏大に怒り、コンナ銀行の危機に際して常務と頭取は常に喧嘩ばかりして居ては仕方なし、組合の監事に再選したる事迄論して予を怒りたり。之れは誠に尤もなる忿怒なり。併して中直しの酒をのみて散す。問題は支店閉鎖の問題なり。

予記 藤太をして〔以下記述なし〕。

二月七日 日曜

晴。朝九時組合支所に於て役員会を開くべく出張す。問題数多なり。一、黄蘗を売るか買ふか（執行役員一任）、其他数多の問題あり。新井の北部中央線改修問題に付ては、村長来り役員会に臨みて三百円位如何かとの話もありたれば、種々研究の結果百円とならんとせし故保留して置き今村、丸山耕地委員に話す。購聯より全購聯増口の為伊藤久保田、伊原来訪し居、催促をうけて二口を増す事となりたり。午後実行班長会を開きて大体方針に付て話し、負債整理の急務なるを説き減債貯金、永安貯金の励行等につき話し、金利等の状況に付ても話をなしたり。竹村より謄写版にして原案を配布ありたしとの希望あり。又昼休中二書記をして事務をとらしめられたしとの話もありたり。牧内伯父来訪し安藤の娘と縁談整ひたりとの報告ありたり。東京前田病院へ電話にて退院の日程打合せたが未だ退院の日程等は出来ずと答ふ。猶耕地の道路委員会あり出席して組合として相談の結果百円以上は六ヶ敷と話せり。

受信 増恵。部会。

社会の今日 上海戦乱の巷となる。英米仏協議申込来。

【語句の説明】①新井の北部中央線：北部中央線は、久井・水城・上

溝・寺所・新井の各耕地を通り、遠州街道に接続する松尾村の村道。

②減債貯金、永安貯金：減債貯金は減債積立金のことか。社債の発行主体が債権の元本支払資金を確保しながら、計画的に償還するために積立てられた資産のこと。永安貯金は永安金とも言い、報徳社の基本財産。報徳社に一口金三〇円以上を寄入すると、永安善種証券が交付される。これが年々利倍増殖して元利金百円に達すると、その内金五〇円が善報金として本人またはその子孫に交付されるといふサイクルを繰り返す形式の貯金だった。

③全購連：全国購買組合聯合会の略。購買事業を営む地方の産業組合聯合会および産業組合により構成され、一九二三年九月一日に事業開始した。出資一口の金額は五百円であった。

④久保田：久保田栄次郎。伊那社監事（一九二二〜一九二八年）、上飯田信用販売購買利用組合長などを務めた。

二月八日 月曜

晴曇。考ふれは種々の用事のみにて専門的に没頭する事出来ず、作興会、銀行、組合、家事、事務多端にして夜静まりて考ふれは徒に事務のみ多くして奔命につかるゝのみなり。銀行を止めんか此危機に際して辞するは一般の思惑益々悪かるべし。他の仕事を止めんか遂に予の立場を失ふべし。―事務に忙殺せらる。廿四時間を自ら使役すべし。使役せらるべからず。下伊那に於ける立候補全部出揃い平野、次に遠山、中原、立看板等出てたり。組合支所に行き青山と話して事務打合を行ふ。時に竹村順一來組し凍豆腐製造模範工場の決定に付き器具機械の組合売込に付て話あり。北部中央線改修に付中島に相談すべく立寄たるも面会出来ず。上飯聯合事務所に下田に面会し、建国祭に關して北原痴山建国の頌を清書しくれざる為、之を活字印刷にて各役場へ配する事を注意す。加藤国民高等学校より講習の件に付断り来りたり。強いて再三之を頼む事を命す。銀行にては監査事務を進捗せり。予記 中島、泰治等と橋本屋に会する積りなりしが彼等居らず。増恵へ50円送金す。組合支所にて米代内渡金百円引出。

【語句の説明】①建国祭：国家主義者の赤尾敏が提唱者となり、左翼のリーダーに対抗する国家主義的示威運動として開催された。一九

二六年二月一日に第一回建国祭が行われて以降、終戦まで続いた。

②北原痴山：北原阿智之助のこと。衆議院議員、下伊那郡会議員、長野県会議員、組合製糸天竜社社長などを務めた。一方で、北原痴山の名で多くの書を残した。

③加藤国民高等学校：日本国民高等学校か。一九二六年に石黒忠篤、那須皓などにより、加藤完治を校長として茨城県に設立された教育施設。疲弊する農村の立て直しのため、農村における中核農家を育成するための機関としてデンマークの国民高等学校が紹介されたが、日本国民高等学校もこれをモデルとしたものである。加藤は農業実習のみならず、日本農民としての精神面の修養にも重きをおき、農村社会で指導的役割を果たす人材の育成を目指した。

二月九日 火曜

曇。朝北河原耕地整理を見る。人足十二、三人出場し盛に土工をなすを監督せり。牧内信弥と工区主幹小沢氏に面会して、弁天橋の不用となりたる時は元の縁故者へ無償交付せられ度き事を陳情せり。予は説明して曰く、「弁天橋は明治四十四年に有志によりて架橋せられ、大正十三年郡道なりし故時代に伴はずと郡より云はれ、松尾、喬木両村より若干金の包み金（1000円）を貰ひ遂に郡に寄附せるものにて、其時万一不用となりたる時は元の縁故者へ無償交付せられたしと特約し置きたるものなり」と陳へたり。作興会の奉読用の建国頌印刷出来ず、各町村へ建国祭を中央にては行はざるも各町村に於て盛にせられ度しと申送るべく下田に命す。銀行へ出勤す。長野貯蓄銀行阪本重雄氏来訪し貯蓄預金尻一万四千円に対し篠田宗一貸金、吉川鉄治積金証を与へて取引を復活の話をなす。頭取来らず、午後監査事務を執行す。山

本兄来訪せるにより午後五時帰宅せり。選挙事務所を訪問して見んと思ひしも未たせず。

〔欄外〕綾川氏立候補に付金三十円見舞として送金す。

社会の今日 選挙戦酣にして飯田て立会演舌あり。

【語句の説明】①弁天橋：天竜川に架かる橋。飯田市松尾村、喬木村、下久堅村の境界付近にあたる。一九一〇年末に工事に着手、翌一九一五年五月竣工し開通。昭和期に入ると、伊那電気鉄道の開通により弁天橋の利用度が高くなり、また交通機関の発達により橋の架け替えが必要になった。松尾・喬木両村は県に架け替えを陳情し、後の三二年に起工、三三年一〇月、旧橋の下流にコンクリート橋が開通する。

②長野貯蓄銀行：一九二一年四月の貯蓄銀行法公布に伴い、同年一月に六十三銀行頭取小林暢をはじめ県内有力銀行の代表者が発起人となり創立された貯蓄銀行。一九三〇年以降、恐慌の影響を強く受け、預金・積金が大幅に減少する苦境に陥った。その後業況は回復に向かい、零細な貯蓄性貯金の吸収に努めた。一九四三年に八十二銀行と合同した。

③阪本重雄：坂本重雄。一九二八年信濃銀行監査役に就任。その後長野貯蓄銀行常務取締役（一九三〇～四三年）を務める。八十二銀行への合同後は同銀行監査役に就任した（一九五六年まで在任）。

④篠田宗一：一九三三年に飯田町会議員に当選、三七年の飯田市成立後は同市議員を務める。戦後には飯田市議会副議長（一九四七～五〇年）、飯田市議会議長（一九五〇～五一年）を歴任。その他、飯田商工会創立委員、同初代理事を務めた。

二月十日 水曜

曇。朝七時警鐘に起き出て、見れば、飯田に黒煙天に押しし火事あり。飯田劇場附近なりと云ふ。直に朝食を喫して上飯す。福住、鈴木、勤労党本部、南信新聞等を慰問す。幸に南信社は東の板壁焼け焦れたるのみ。劇場の一廓殆んど焼けたり（半焼のものあり）。銀行へ出勤す。宿直石川なり。飯田は無風帯にて朝の火事なりし故類焼も少なくてすみし。銀行にては検査を行ひて午後三時迄居りしが、聯合事務所に部会ありて出席す。部会総会にて問題の産業組合講習所の存続問題に付ては、予は独り存続論を唱へ、遂に可否を決する事となり一八対廿一にて廃止する事となる。尚会長、副会長、理事、幹事改選に入りて、予は評議員も何も全部役員の部類より除かれたり。之れ銀行の予に禍ひしたるものならん。予か心にもなき銀行に関係し居ればこそ社会より誤解を被るなれ、銀行より解脱して産業組合に没頭したらんには、或は今日以上の予の声誉を増し居たりしならん。誤られたるは銀行に進みたる事なり。かりそめに銀行に入りたる結果遂に今日の不遇に会したるなり。

予記 予は元より銀行に入りて一生の活路を開かんとせるものにあらず、寧ろ学生時代より報徳社に興味を有したり。然るに大平に誤られて銀行に入り今日の不幸を招けり。

【語句の説明】①飯田劇場：飯田追手町（現・飯田市追手町）に存在していた芝居小屋。一九二五年、資本金二万円の株式会社として創立されたが、三一年には経営難に陥り、土地建物を抵当として信産銀行、百十七銀行から借り入れを行っていた。一九三二年二月一日早朝、劇場内から出火し、劇場本館を全焼したほか、隣接する飯田町料芸組合事務所など五棟が全半焼する火事となった。

②南信社：南信新聞。一九〇二年一月に発行。下伊那郡立憲政友倶楽部の機関誌。民政党系の「信濃時事」に対抗していた。

③産業組合講習所：一般に産業組合の実務に従事する人などに必要な知識を教授する施設。産業組合の下伊那部会では、農学校内に設けた産業組合講習所の県移管を目指していたが実現せず、一九三一年一月時点でもう一年は存続し移管を図る方針となっていた。

④会長、副会長、理事、幹事改選：松尾村産業組合の指導・育成機関の系統は、産業組合中央会―長野県支会―下伊那部会となっていた。日記中では下伊那部会の役員改選について記述されている。州平は一九二九年三月に評議員に選出されていた。

二月十一日 木曜

曇。国体観念を明徴ならしむべき紀元節に際して、小学校に出席して祝賀すへきてあつた処が、正三の所て家内が死去して不幸か起つた。組合のものか集合して葬式の用意をなすべく決定した。下男久男をして北方迄使に遣はす事とした。是より先、菊と庄太郎が来訪。常盤友治の旧家敷前の友治小作地を貸してくれないかとの申込があつた。調査して父と相談して貸してもよい、田三筆但し年貢は街道沿の二筆は宅地とし坪一升二合を調すと云ふてやつた。午後向山を視察して境界線を見、其境界に木か延びた事を見た。八ヶ島には丸岡屋か埋没電柱を掘り出して居た。北河原の耕地整理を見に行つた。七三方へ年賀に行つた。風呂敷（沢村屋）を一つ持参した。伊沢太郎、千葉の病院から帰つたと聞いた。夜はマツを頼んで按摩せしめた。

父がダン／＼弱る様に見へて何とかすべき事を考へた。財産の擁護もせねはならん。タケノの父要造から手紙にて信州へは嫁にはやれん

と申て来た。

「共産党の正体と撲滅策」を読んだ。  
発信 静野要三。

【語句の説明】「共産党の正体と撲滅策」：日本新聞社編集局編『共産党の正体と撲滅策』のことを指す。一九三一年一二月先進社から刊行された。共産党批判を主目的として、共産党の活動状況や目的等が網羅的に記述されている。

二月十二日 金曜

晴。組合より銀行へ出勤す。午前中北河原耕地整理の場所を検す。午後早く退出して家へ帰り、森本正三の家内葬式に会葬せしも既に早く終了して、葬式後見舞に組合より未代依託代金の内二百円受取之を持ちて上京、信也の退院費とす。夜行にて出発す。多忙なる日なり。電車中原飯田病院長と同行、汽車には上久堅島岡某あり。共に相対して車中に眠り行く。

各地選挙戦盛なるも皆戦費少く、一般に無気力不活潑なる選挙なり。之れ財界の不況、戦費の欠乏、選挙へ倦みたる人心、外交問題、支那問題等に視聽を向け居ること等の原因にて一般気乗せざる事夥し。各地共皆同様の情勢らし。中原は若い衆が之に没頭し居り、予は一度も事務所へ出頭せず、銀行の屋台骨倒れか、つたのを既倒に恢復せんと懸命の努力を払ひ居ればとて此回の政戦には遠慮し居れり。

併して此の如き事は不愉快なり。銀行へ入りたるは予の一生の方向を誤りたるものにして、予が組合を根拠としてそれ以外に手を出さざりし方よろしかりし処なり。今更銀行を止める事も出来ず自ら縄自縛となる。

二月十三日 土曜

快晴。朝六時半前田病院着すれば増恵、信也も起床の処なり。来意を告げて退院の手伝なりとして午前九時院長の回診の際退院し得るや否やを問へは、退院して可なるべしとの事に、明十四日退院する事に決し其旨事務室に申出、其夜は病院に一泊す。前田病院は規律整然として清潔、待遇も亦親切なり。併しハイカラ病院にて一流のものならでは入院せず。付近の宿屋に泊りて通院せんと志せしも適當のものなく、駿台荘に一時引上げる事に決す。其夜勝男来訪してくれたり。

信也傷口未だ癒へず。上京して看病し居れば選挙の事、組合銀行の事等胸裡より去り居りて呑気なり。

二月十四日 日曜

雨。増恵を伴ひて三越を見物す。午後三時頃元三、清彦来訪せり。併し不在にて面会せず。午後五時退院す。自動車にて神田駿台荘に引揚げたり。勝男手伝に來りくれ万事都合よろし。信也カユを食して駿台荘の帳場の付近の室に陣取る。増恵の見物には三越、松阪屋等最もよろし。

二月十五日 月曜

雨。午前中増恵と共に上野博物館を見物す。午後に至りて国本社に太田耕造氏を訪問し本多熊太郎氏講演に差遣せられ度旨申込む。太田氏選挙後になりて本多氏に御願して見ると云はれたり。辞して福寿ヒルに鈴木豊弁護士を訪ひたるに不在、帰宿。電話にて鈴木弁護士を雨中訪問。銀行よりの懸案原守国に対する貸附金に付親属会議の同意書なくして後見人が被後見人の所有株式を担保として金を貸したる件に

付、其の債権擁護方法に付問糾し鑑定を頼む事とし、尚祖父か子を通さずして其孫に其財産を譲渡する事に付て其方法を研究を頼みたり。尚鈴木氏は駒井重次氏選挙の応援として没頭しつゝ、ある由を聞けり。帰宿後再び九段富士見町に原勇三を訪問して信也手術の礼として金三十円を包み贈り、飯田袖袴地一反と共に返礼せり。原勇三氏二階の応接室に通しけれ相当豪奢の生活をなし居るもの、如し。妻君出て來りて挨拶せり。暫く話して帰宿せり。雨降りて都大路も行人稀なり。

原博士礼の金高に就ては信也も心配し、予は二十円と云ひしも、信也は五十円を出してくれと云ひ其中をとりて三十円出せり。

【語句の説明】①国本社：上杉慎吉、天野辰夫らが結成した興国同志会の一部が平沼騏一郎を迎えて立ち上げた国家主義的団体。

②本多熊太郎：一八七四〜一九四八年。昭和期の外交官。スイス公使、ドイツ大使などを歴任した。当時は在野で強硬派の外交評論家として活動し、国本社とも関係があった。

③駒井重次：一八九五〜一九七三年。一九二〇年東京帝国大学商科卒、前橋税務署長等を務めた。民政党新人として東京二区から出馬していた。

二月十六日 火曜

晴。雨晴れ気澄み暖にて、隰（湿）地より上る水蒸気陽炎に梅薫し。郊外散策をそゝるか如き日なり。起き出て、増恵か江の島鎌倉より忠雄の宅を訪問せんと希望し（浅草見物よりも）、急き仕度をなして新宿に出て玩具、菓子等買ひて、午前十一時新宿発て小田急電車で江の島行。

午後は風出て波濤高く栈橋を吹く。沖には白浪立ちて春寒し。

春浅くして江ノ島を訪問する人も少し。江ノ島の棧橋を渡つて旅館にて昼食をとりて山に登り、屈曲幾多して店の女どもの呼売の声を鳥の啼る音の如く聞き捨て、奥の院より渚迄下り怒涛の岩を嘯む辺り増恵には珍らし。富士山よく見へて増恵喜ぶ事限りなし。

江ノ島周遊して片瀬より電車にて鎌倉に來り八幡社を參詣す。拝殿にて福銭を買ひたり。二の鳥居前にて馬車に乗りて停車場に來り、鎌倉駅より横須賀行に乘して午後四時横須賀着。風吹き春浅ければ寒し。汐入町と聞きて未知の所を問ひ糾しつ、訪ねて三九四番地の牧内忠雄と名札の家を山の中腹に見付け訪れば、安子夫人子供と一所に暮し居り。

電話で海兵団に忠雄を呼びしも、明日の海軍葬（上海事件）ありて八時頃迄帰れすとの事て、其れ迄待つ事とし子供の可愛盛りを相手として夕食の饗応をうけたり。

午後八時忠雄帰宅。

午後十一時東京へ歸る。

社会の今日 平野、遠山、中原の三者立ち争へとも、氣乗薄の選挙なり。

【語句の説明】明日の海軍葬：上海事變で戦死した曾木与吉海軍少佐をはじめとする二九名の合同葬儀が、二月一七日午後二時より横須賀海兵団において行われた。

二月十七日 水曜

晴。午前中勤労党本部を訪問す。神永、中谷共に信州中原応援に出陣し不在なりと書生云ふ。徒に今頃ボンヤリ党本部を訪問する予の干なるにも自ら愛憎〔想〕をつかす。書生の無愛憎〔想〕なる取次に神

永宛にて名刺を書いて置き來れり。午前中三省堂書店にて藤村著「夜明前」を買ひたり。

午後増恵を伴ひ松阪屋へ土産物買入少々浅草行、松屋デパートを訪問し観音様へ參詣す。活動写真、喜劇等の見物はイヤだと云ふので松阪屋に地下鉄道によりて歸り、買物して自動車にて帰宿し、勝男の來訪をうけて荷作りして帰る事とし、勝男には茶器一揃一円半のものを礼として贈れり。午後十時廿五分発にて飯田町を出発す。野原文四郎氏來訪しくれ、共に同車して歸る。此車中に選挙関係者伊藤兵三氏等居合せたり。

社会の今日 第三区としての予の予想は、小川、平野、戸田、宮沢ならん。

【語句の説明】①「夜明前」：島崎藤村の長編小説。一九二九年四月から三五年一〇月まで『中央公論』に年四回ずつ連載された。中山道馬籠宿で本陣、庄屋、問屋を兼ねた青山半蔵の生涯をたどりながら、明治維新前後の時代推移を丹念に書いた歴史小説。州平が購入したのは一九三二年一月新潮社から刊行された第一部。

②野原文四郎：一八七〇—一九五一年。上伊那郡大草村の高坂家に生まれる。飯田町の旧家野原家の養子に入り酒造業を営んだ。一九〇一年から飯田町会議員を二期務める。一九三七年の飯田市成立により初代市長となり、三九年まで務めた。その他、飯田商工会議所会頭、飯田土地建物社長、飯田銀行取締役、三信鉄道取締役などを歴任した。

③伊藤兵三：遠山方景の選挙を支援しており、選挙後に選挙違反事件で逮捕された。

④第三区としての予の予想は、小川、平野、戸田、宮沢ならん：上下

伊那郡と諏訪郡から成る長野三区は、定数四人に対して七人の立候補者を得ていた。結果は、政友会の小川平吉、平野桑四郎が悠々当選を収め、民政党では戸田由美が辛くも最下位当選、宮沢胤勇は次点にとどまった。かわりに政友会・有馬浅雄が当選し、前回選挙の政友一、民政三の結果を逆転することになった。

## 二月十八日 木曜

晴。朝八時飯田着。銀行にて終日執務せり。増恵は片桐にて下車して清泉地を訪問して午後二時帰宅せり。予は夕刻帰宅す。銀行も小康を得つ、あれども用件は多し。中原の選挙事務所へも一度も顔を出さず。銀行の屋台骨か倒れか、れるを支へるべく懸命の努力して居ると一度も出頭せず。義理悪しと云へとも出頭すれば同じく拝み倒されざるを得ず。又出さねば中谷の如きは搾取せんと取りかゝるを免れず。代議士となるの望みもなければ縁の下の力持ちとなるのもつまらんと考へ、少しも選挙には関係せず。夜に入りて帰宅すれば一時に家内賑しくなり子供等喜び会ふ。タケノ親許より信州へは嫁す事不賛成の手紙来る。之にてタケノと久男との縁談マトマラざる様子なり。

選挙は一般に気乗薄の様子なり。之れ外交問題、日支関係、不景気、一般既成政党に嫌気を生したる事等原因をなすもの、如し。予の予想は中原と遠山とは五角なるべし。平野は当選確実なるべし。信濃路に入りて雪を見る。伊那町辺の積雪二寸あり。

## 二月十九日 金曜

晴。午前中北河原工事を見る。工事九分通り出来上りたり。林延司と云ふ男は無口な利口な男にて、工事等には慣れ居り、土方を統率す

る力ある如し。

組合支所行。青山不在にて面会出来ず。村田屋にて竹泉堂来飯し居り京都の北岡猪三郎と云ふ骨董屋を同伴し来飯し、村田屋の道具書画を売立すべく来飯したり。予の宅へも父の請により来る由なれば、予の研究せる父より孫に其財産を相続せしむる事を、竹泉堂をして父に申〔進〕言せしむへく依頼せり。北岡氏に面会せり。次に銀行に出勤し検査の続行をなす。諸事全て齟齬し、予の前途には銀行入の悪業つきまとゐつ、あるもの、如く、今更何故銀行入をなしたるかを悔ゆれども詮なし。竹泉堂も曾て其不可なるを予に勧告し、青山も吉野も中原も皆其不可を勧告せり。松沢も亦然り。今日となりて悔ゆるも詮なし。

中原より使者林某来り中原の手紙を持参して、下中弥三郎氏来飯すれば金策つくに付此際金を貸してくれと申込まれたるも、銀行の倒れか、れる際如何ともし難しとて金二十円を封入して贈る。

【語句の説明】①北岡猪三郎：一八七八年生まれ。京都府人先代猪三郎の二男。一九一八年家督相続と共に襲名。古物商を営みつつ、北岡商店の代表社員を務めた。

②下中弥三郎：一八七八〜一九六一年。平凡社の創業者として知られる。結成準備中の新党の宣伝のため、この時の選挙に候補者を立てて臨んでいた。

## 二月二十日 土曜

曇雪。米価益々暴騰せり。北河原工事を見る。林延司来訪し工事内金五十円を渡す。掘り出したる石を他へ転売せざる事を申込む。組合支所より散策に行きて、散策し本所へ行く。本所で市瀬に要件を命し

て工場を一巡して午後飯田に上る。渋谷より藤原次郎吉倅中学を卒業したれば就職口につきて頼まれたり。銀行にては検査をなす。

今回の選挙には中原か推されて、青年等の為に病床にあつて当落を度外視し主義宣伝の為に立候補する事に決し、中原は一度も演壇に立たず。東京より中谷、神永の両氏及下中弥三郎氏か応援に来たと云ふ。予は一度も選挙事務所へも出頭せず、蔭に中原の当選を祈つた。

勤労党は下中氏等の斡旋で鹿子木先生を指導者として、勤労党の主義を立つて国民社会党準備会を立て之を以て立候補し、他日愛国勤労党も合同して独逸のヒットラーの如く権政を獲んと試みる手筈であつたか、日支問題（上海）満蒙問題突発の為、国民の愛国心は無産党の出現を霧散せしむるに至つた。

予記 従つて如何なる政党としても、一政党を新に樹立する事は難中の難事たるを失はず。勤労党も一万票位は獲得する積りてか、つたか、果して幾何なるや。

〔欄外〕垣根結終了す。伊那電より萩〔萩〕を買ひて添付す。二十束六円なり。

発信 千草。信也。

受信 福沢憲和、返礼。

社会の今日 政友の政策当り民政の政策不景気は大失敗なり。

【語句の説明】①鹿子木先生…鹿子木員信（一八八四～一九四九年）。

大アジア主義の思想運動を推進。老荘会と深い関係を有し、猶存社にも参加。一九二六年、九州帝国大学法文学部教授に就任。一九三〇年二月結成された愛国勤労党の顧問としても活動した。三二年五月、下中弥三郎派が結成した新日本国民同盟の顧問も務めた。

②政友の政策当り民政の政策不景気は大失敗…犬養内閣は民政党内閣

下に行われた金解禁政策を転換し、金輸出の再禁止により景気回復を図っていた。なお、金輸出再禁止の影響により、犬養内閣成立後一ヶ月ほどで米価は三十三銭高くなっていた。

二月二十一日 日曜

朝晴。朝北河原工事の土方来り工事の内金五十円を渡す。下女下男問題に付下女は越後から頼むか又はムラを使ふか、下男は清泉地の世話にて片桐村より雇入る、事として話を進めたり。下女タケノと下男久男との結婚問題はタケノ国元にて反対の為遂に不成立に終る。朝組合支所へ行き居たるに太次郎と林延司来組し、工事場より出てたる石を売る事を禁せられたるも、何とか他に方法を講せられたしとの事と一緒に工事場に行きて大石五十ヶを限り保存すべく命し、外に庭石四ヶを運搬せしむべく命したり（15円）。然るに之には父反対し色をなしたれば、更に太次郎を招き前約を取消さしめたり。吉川医師来診す。上飯して税務署に所得調査員集り署長出名するに付長野県下の窮状を訴へ、軽減してもらい度旨陳情せり（養蚕は米作の如く凶作に同情なし）。陳情後仙安にて夕食を喫し夕九時迄飲む。選挙の開票の結果報道せられ政友の政策当れり。多忙なる日なりしも忙中閑を得、上伊那、諏訪、両郡開票の結果小川は既に当選し他は何れか勝つや不明なり。

二月二十二日 月曜

晴。朝家内相談して下女下男問題にふれたり。下女は越後より頼むか（与一）かムラムラを使雇するかに付き研究したるに、越後へ連れて行くには佐太郎にては不向となり、第一にムラムラに交渉する事とし、松を呼ひよせて其内意を糾せしに本人に意を問ふ旨返事あり。タケノは越

後に帰ると申出ず。

組合にて青山専務より話あり。常務として江塚佐三郎氏を推され度旨申出ありたり。猶事務上に付打合せをなして本所行。二時間計り本所に居りて事務を見て上飯す。下伊那開票中にて新聞社前等は人の黒山を築き居りたり。午後一時出行、検査す。村田屋に滞在の小池予に面会を求めたれば、上柳に行く。書画骨董品を売却せんとするものなり。

鼎村選挙違犯にて村長林、組合長牧野以下多数検挙をうけ村会も出来すと云ふ。

【語句の説明】鼎村選挙違犯：遠山方景一派の違反事件で、一九日時点で村長、組合長をはじめ、村議会議員の一六分の九人が留置されていた。

二月二十三日 火曜

晴。朝起きて見れば雪僅に積り居れり。寒氣襲来し結氷せり。北河原工事を見る。同日夕刻竣工の筈なる由。直に上飯、出勤す。検査を行ふ。竹仙堂へ電話にて父か売骨董をせざる由申伝ふ。中原に落選の後の病軀に注意すべき様申送る。銀行の支店長更迭、支店事務移管等につき打合を行ふ。予は断然不用行員を淘汰すべしと論す。北河原工事竣工し林延司の工事を検分し完成を謝し酒三升を奢り与ふ。小屋にて土方連中と呑みて帰宅。

社会の今日 選挙の結果政友三〇三、民政一四六なり。

二月二十四日 水曜

晴。今朝三時十分充員召集令状着し村より十九名召集せられたりと

の報を聞く。土方林延司来り工事費の内金百円を与ふ。組合へ行く。

動員召集下令となり上下大変動なり。組合支所へ行く。動員下令の爲人心不安にて軍人会の連中東奔西走せり。仍て役場へ行きて其状況を見るに本日午後一時県社参拝後小学校に於て、召集の十九名に対して壮行会を開く。尚見送の旗煙火其他に付役場も多忙を極む。出征を送る襷一施宛を贈る。予は在郷軍人会の漸次応召せらるゝを以て、留守軍人分会員を予め定め置くべしと告げて組合本所に行く。機械屋来り話す。県社に出征を祈る式あり。午後三時より小学校に於て壮行会あり出席す。終つて酒肴役場より出ず。石原に青山の申出の件を話す。石原曰く田中、吉川等に話しては如何と。仍ち其言の如くならず。新井川の井勘定榎屋にてあり出席す。夕食を喫す。夜に入りて帰る。猪佐雄、中島、晴男との五人なり。夜宮沢藤太郎養子明日入宮に付之を見舞ふ。

金五十銭贈る。銀行欠勤す。

予記 予は上海事件は滿蒙問題のケンセイ策として上海を攻撃するものならん。

〔欄外〕午後十一時頃充員召集あり。動員下り人心騒かし。松尾村一人。

【語句の説明】動員召集下令：当時長野県は宇都宮の第十四師団管区の管下であり、松本の歩兵第五〇連隊に召集されることが多かった。第一次上海事変発生後、陸軍は二月二〇日から攻撃を開始するも戦局は進展せず、救援部隊の増派を内地に要請した。これにより善通寺の第十一師団と第十四師団に即時動員が下令された。

二月二十五日 木曜

午後雪。朝五時八幡駅に出発兵三名を送る。見送人殆んど一戸一人宛は出て、送りたり。手に手に聯隊旗（子供の）のため小旗を持ちて見送る。八幡駅にては出征兵士の見送りは初めてなれば、賑やかにて各戸必ず一人は出てたるなるべし。中島及泰治の耕地委員も出席して見送る。午前五時十四分発にて出征兵士三名松本行。見送りにて後本所組合に行きて経済雑誌等見て、組合の製糸部の始業の模様等を見たり。午前中に吉川順次郎を呼びよせて、青山が予に告げたる、年老いて故、江塚を常務理事として組合の仕事に携せられ度しとの申込を告げて判断を乞ふべく話せり。午後常盤友治来組し定期預金の払戻に付て話あり。安心して預け置くべき旨を告ぐ。午前十一時頃より雪降り始む。午後上飯、銀行出勤せり。行員の異動に付て打合せをなす。夕刻既に積る事三四寸近來初めての雪にて大雪なり。今村太原治弟出征する由にて彼は松本に行きて帰りたり。

予記 戦時気分なれとも極めて鈍感なり。

社会の今日 上海事変愈々動員下令。十九名の内二名出發。

## 二月二十六日 金曜

晴。本朝も三、四名松本に向け出征兵出發せり。見送らずして休む。朝父に日銀株と勸銀株との交換に付て話し合ひしか肯せず。父は三原屋文雄来りて家政上の話をなすべく計画し居りし様なれとも来らず。予は組合支所に行けば中島、泰治の耕地委員居合せ、道路予定線を研究すとして上溝、寺所の委員二名も来り合せて状況を見る。暫くにして設計木下作太郎来組したり。予は本所に田中句一郎来りたるをき、て面会を申込みて本所行。事務問題に付て彼の意見を問ふ。乃ち田中曰く、予、然らば江塚佐三郎の意中を瀕踏せんとして製糸部を引受けて之

に当らしめん（と）計画せり。予、之を諾して其手筈をなす。本問題は予の進退問題にて重要な問題にて常に胸裡を往來す。農会総会ありしも予は午後本所より上飯して銀行出勤し、行員異動之計画を立てたり。予約したる下男（片桐）応召して来る事を得ず。予記 積雪五寸。上海問題と外交問題に付て憂ふべき事のみ多く、為に生糸の値上らず。

## 二月二十七日 土曜

晴。中沢支店へ事務移管の為出張す。赤穂支店に立寄り直に中沢行。金庫は二ヶありたるも一は赤穂支店に運搬し、一つは久保田氏へ記念品として贈呈する事として取残して置けり。家主森田氏へも交渉し村役場へ久保田、宮沢両氏と共に行き種々厄介になりたる旨の礼を述べ、事務移管の旨を告げて山林を預金にて買入れてもらい度意も通す。支店に帰つて事務の引継は新井好吉をして行はしめ、現金も受取つて金庫三号は久保田へ記念品として贈呈する事として、一号金庫及机椅子等を書類と全部赤穂支店に運搬せしむ。午後五時家主森田を伴ひて久保田を主賓として夕食の宴を催し閉店をなし赤穂に引上く。加納宮田支店長、平沢飯島支店長を召致して前者は伊那町へ後者は宮田支店へ転任の内命を伝ふ。前者は別に何事もなかつたか、後者は是非飯島へ置いてもらい度しとの希望があつた。併し止む事を得ずして転任せしむる事とし宮田へ。夜に入りて千章を訪問し一泊す。翌朝早朝起き出て、帰る。

【語句の説明】①中沢支店：一九二九年に設立された百十七銀行の支

店。同銀行は飯田町本店の他に、一九一九年で辰野、赤穂、駒場、下条、市田、伊賀良、高遠、八幡の八支店を展開していた。一九二

九年段階では中沢支店の他、伊那、宮田、飯島、片桐、伝馬町の六支店も営業していたが、その後宮田、中沢、片桐、伊賀良、下条、伝馬町の諸支店が廃止となった。

②加納：加納政雄。百十七銀行宮田支店長心得。

③平沢：平沢瀧雄。百十七銀行飯島支店長代理。

二月二十八日 日曜

晴。吹雪。朝五時兵士見送を機として代田を辞した。午前七時半帰宅した。太次郎、小林太一を呼びよせて北河原耕地整理の田地へ水を張る事を話して、井を作るには田畑と共に出て、水路を作り水をつける事を考究すべしと宣す。両人は発掘石を買ひたる事及工事残金十五円を貰ひ度由申込かあつたか之を拒否した。

午前十一時役場へ出頭した。予算村会に出席した。百十七Bの問題も出つるべければ用心し度と思ひしが、一日で全部通過し終つたので誠に一瀉千里、何の異論も出なかつた。只竹村より製蚕補助を廃止せざる事（廃止の元案）。

日米間経済封鎖の懸念ありて生糸暴落す。併し一般には米国の恫喝外交なりとして別に之を怪まず、経済封鎖の如きは出来ざる事なりとタカをク、ルもの多し。

社会の今日 米国、日本の征支を怒り経済封鎖すとして生糸等輸出品値暴落。

二月二十九日 月曜

晴。村会の決議により村会議員一同より伊沢太郎の見舞に行く事となり、予と鋤柄角太郎の二人訪問する事となりたるに付待ちたるも

鋤柄来らず。見舞品雞卵百個を届けられたれば、自ら訪問して彼は大に喜ひたり。彼の病氣は胃中出血し破れたれば最後の病状善き由にて家族皆喜ひ合へり。太次郎北河原田の畦を石垣にすとして下男と共に石垣を作る。其の現場を見る。午前十一時上飯、銀行出勤。中沢支店事務移管出張の報告を頭取になす。

帰宅後直に臥床す。組合役員会開催の件を青山専務に命ず。

兵士出発、上海事件益々熾にして戦争気分か旺〔汪〕溢して居る。

各駅には出征兵士に煙草其他慰問品を贈る所もあるとか。村では子供婦女子迄も国旗を手にして寒天を物ともせず見送る。旗も五本迄は樹てしめる事となつた。国民思想は之によつて清められ共産主義の如きは消えてしまふ。此期を利用して国民精神の作興を計らねはならん。戦争は総てのもの破壊であると共に建設である。共産思想は破壊せられて東洋文明の芽生か愈々延ひる時となつた。

社会の今日 上海事件益々旺盛、応召兵出発あり。

【語句の説明】 鋤柄角太郎：松尾村産業組合第二工場主任（一九一六～二〇年）を経て、当時村会議員（一九二九～三三年）。一九三二年から三五年にかけて、寺所耕地の耕地委員を務めた。

三月一日 火曜

晴。組合か休みなので直に上飯して西村田屋を訪問した。百十七銀行伝馬町支店か廃止となり借家を西上柳に返却する交渉も皆頭取かし居たので、其の方の話は逐〔に〕一度も伯父にもせないので訪問して其挨拶をなすべく訪問した。併し伯父は未だ床の中に居ると云ふので、敏雄に面会して其話をして帰つた。銀行には井村が支店員を連れて入つて来た。伝馬町支店には一人の寺島を残留せしめて、今日は銀

行は忙はしい日であつた。行員移動の問題や種々の問題か輻輳した。

井村の八幡支店長兼務は予の主張通り。井村は好感を以て之を迎へなかつた。朝五時十四分竹下広吉か出征の為応召出発するので見送つた。集会所では朝三時から当番が集まつて壮行会の仕度をした。吾々は丁度当番であるので下男を遣はした。予は四時に起きて五時十四分八幡

駅に入営兵を見送つた。見送人が小学生、処女会員、消防、軍人会其他一般のもので埋まり駅外にもあふれ出で楽隊も出て盛である。下久堅のものも参加し万歳の声か熾に起る。敵は幾万の歌か出る。軍歌で賑かである。小学校生徒は国旗を振り小国民の壮行見送も多い。

予記 二月分家賃を前沢氏か来行して渡してくれた。日比野亦来て十二月分を渡して行つた。

### 三月二日 水曜

晴。銀行へ出勤せず組合へ行きて種々斡旋す。道路委員今村与一郎は、組合前より弁天橋に至る道路を新井にて請負ひ地元請負をなし来り、之を分割して寺所（希望あり）も之を分たんとし、種々画策せり。猶組合よりの寄附金を決定せられ度旨話あり。午前中支所に居りて午後本所行、田中句一郎と会して、青山の申出により江塚を常務理事として製糸部事業全部を請負はしめんとし、田中を仲介として其運動を進む。予は田中に青山よりの申出を伝へ、青山か老令となりたるを以て江塚をして事務の分担を計られたし、との申出に付て充分熟慮の結果田中に話し、田中よりの話により、之は青山をして製糸部の事務全部に対して江塚に一任せしむる事とし、青山は信用、購買利用の事務及全般に亘る主なる事務を執掌せしむる事を田中より青山に話し、之を理事会に持ち出して遂に理事の承諾を経て之を江塚に話す事とせり。

午後一時より本所に理事会を開き打合をなしたり。凍豆腐模範工場買収評価をなしたり。道路寄付金も百二十五円と決したり。

予記 青山の予ニ申出次ノ通り。老令ニ及ひ事務煩多ナルヲ以テ江塚氏ニ分担セシメラレタシ。

予、逃ケルノテハナイカ。

青、ナシ、当分ノ間荷ヲ輕メラレタシ、当分ノ間トハ任期中ノ事ナリ、ト。予ハ付加ヘタ、然ラハ話しテ見ルヘシ。

### 三月三日 木曜

晴。組合支所に出頭して江塚に会はんとせしに、江塚不在。今村与一郎を訪問して組合より理事会の決議により道路に対して百廿五円寄附する旨を告げたり。其の運動方法として充分尽したりと付言す。八幡支店に井村後任支店長と龍口前支店長との間に引継を立会ふ。午後三時半終了して本店に行く。其状況を頭取に報告せり。下男久男をして下男奉公に出るものを捜さしめしが直に見付け得たり。母、西村田屋法事に行く。

信也駿台荘より信陽舎に移り病氣静養せり。

名古屋方面銀行界破綻続出し、愛知、明治合併、村瀬閉店等の話も伝へらる。

社会の今日 吳淞砲台占領。上海事件如何に成行くか心配。

【語句の説明】①井村後任支店長と龍口前支店長：井村成次と龍口荘

一。龍口は後に一九三三年段階では飯島支店長を務める。

②名古屋方面銀行界破綻続出し、愛知、明治合併、村瀬閉店等の話：

一九三二年三月、恐慌の影響によつて名古屋の村瀬および村瀬貯蓄の両行が休業した。同時に明治銀行は愛知銀行への合併を策し、交

渉の模様が新聞紙上に発表されたが、事実合併が不調に終り、つい  
に三月四日に休業を発表した。その影響により預金者が動揺し、市  
内の各銀行はほとんど例外なく取付けに遭った。その後、名古屋に  
本店を置く普通銀行として残ったのは愛知銀行、名古屋銀行、伊藤  
銀行の三行だけとなった。

### 三月四日 金曜

晴曇雨。組合支所に行つて江塚佐三郎氏に面会して組合の製糸部の  
仕事を引受けて貰ひ度いと話込んだ。其れは青山専務か雑務多端なる  
事から、予か銀行関係も退引ならん立場にあるから是非やつて貰ひ度  
と申込んだ。併し両三日考慮し度しとの返事があつた。それから種々  
組合の話をした。記念日の事、製糸部の仕事は全部担任してやつて貰  
ひ度き事、其他に付話して了解を求め是非共受けて貰ひ度と結んだ。  
青山にも六日午前支所に於て役員会を開く旨話した。

西上柳静の一周忌に招かれて上飯した。西上柳て伯父に挨拶して、  
嗟、神戸から昇平か来て居る事だろと云ふと、伯父は涙を目にくも  
らして、実は過労の結果両三日前神経衰弱を起して帰つて居るとの話  
の後老人がオメ／＼泣いた。予も胸を打たれて泣いた。何と云ふ不幸  
な家だろ。銀行の支店は閉ちる。肝要な息子は精神病者となる。西  
の将来悲惨の極だ。法事は終つて齋坐を（立派な御馳走）終つて墓参  
して山本兄と銀行で話した。母を西村田屋に止めて单身帰宅した。  
予記 涙多い一周忌である。西村田屋の将来考へれば考へる程悲惨で  
ある。

受信 木下勝男。牧内忠雄。

社会の今日 上海事件停戦、円卓会議。

【語句の説明】①齋坐：臨濟禪における昼食のこと。

②上海事件停戦、円卓会議：戦闘中止の交渉は、主に英米を仲介とし  
て開始直後の一月二九日から二月にかけて行われたが、日中双方の  
停戦条件が一致せず不調となった。二月二八日も日中の非公式会  
談が行われるが、三月一日の日本の総攻撃により交渉は挫折。同三  
日に中国軍が退却し、日中両軍の戦闘中止声明が発せられたことで  
交渉も立ち消えとなった。国際連盟は三月三日、四日、一日に臨  
時総会が開催し、停戦交渉は総会から新設の十九人委員会に託した。  
この委員会が総会の監督下で停戦本会議を設置し、五月五日に停戦  
協定が成立する。

### 三月五日 土曜

快晴。暖気加り陽春の気天地に満つ。野外散歩に好適なり。

宮田支店事務引継の為出張す。午前九時半より四時半に及ぶ。ハラ  
ンスにより貸付金手形其他証憑書類を検し引継をなす。平沢黙し居れ  
とも熱心にて頭脳よろし。加納は交際家として事務家として将来ある  
男なり。終つて千章と共に伊那峽を見物す。自動車にて小田切佐七よ  
り□込の山林を見て、伊那峽に入れば天竜川の水紺碧に湛て駒岳の雪  
と相映し、景気よし。発電所の方迄行きて大久保部落を見れば、南向  
の一廓をなして上伊那地方には稀なる肥沃にして暖なる村落の如く見  
ゆ。此地は将来有望なる地なりと思ふ。川原に下りて石を拾い二ケを  
得たり。持ちて家に帰る。千章よりカジカを贈らる。

午後八時半頃帰宅す。組合記念日に付開会の辞及明日の記念祭の日  
程等につきて草案を作りて後床に入る。十二時を過く。

予記 名古屋地方銀行破綻続出す。明治支猶を発表。岡崎銀行同上。

社会の今日 リットン卿其他シネーウ会委員来邦。

【語句の説明】①伊那峡：天竜川の宮田村・駒ヶ根市沿いにある峡谷。景勝地。

②小田切佐七：小田切は上伊那郡宮田村の地名。小田切川は寺沢川を源流とし天竜川に注ぐ長さ四・五キロメートルの陸川で、材木の流路として古くから利用され、村民の重要な生活河川だった。なお、歴代宮田村長の中に小田切佐七（一八七三～一九三一年）がいる。

佐七は宮田村に生まれ、高遠漢学塾で学んだ後、宮田村助役（一九〇八～〇九年）、同村長（一九一～一四年）、同村会議員（一九〇七～二五年）を歴任したほか、駒ヶ原耕地整理組合長や宮田館製糸重役を務めた。

③大久保部落：大久保は宮田村を構成する集落の一つ。大正期に耕地整理事業が行われ、天竜川電力が発電所を建設、一九二七年に運転を開始した。

④リットン卿其他シネーウ会委員来邦：満州事変勃発を受けて、国際連盟は中国側の要求により一九三一年一月一〇日に調査委員会派遣を決定した。イギリスのリットン伯爵ら英米仏独伊の委員からなる通称リットン調査団が三二年二月二九日に日本に到着。中国での調査を経て、一〇月に調査団は連盟理事會に調査報告書（リットン報告書）を提出した。

三月六日 日曜

晴。組合記念日なり。午前中役員会あり、吉川順次郎より、工場統一に付ては乾燥の不備、製糸の色沢の不統一等を問題として、工場事務所統一を計るべく努力すべしとの案出て、研究せり。又出征兵士の

遺族慰問に付ても種々の案提出せられたり。青山の専務の事務分担に付ては青山が真意組合長の椅子を窺ふに在りと思へとも其の真意を表明せず、江塚に話したる案にては承服せざる様聞及ひたれば、此の話は暫く延期する事とす。青山が組合長になりたき意志は充分にあり。然れとも彼をして名をなさしめざる事肝要なり。予は之に付て充分考慮したるも、青山をして組合長となさしむるは予に於て忍びざる処なり。予は報告会開会の辞に於て日本の産業組合は報徳精神を加味すべしと論したるに、往に北原部会長と其の旨を同一としたるは暗合なり。又大体方針に於ては不況突破、減債貯金、合理化、事務整理等を話したり。部会より北原会長来り、報徳精神に付て予と同一論をなし（予の論よりは委し）、最後に二つ工場のあるは不経済なり、宜しく統一すべしと結へり。

予記 宮阪詰宗師を中田敬介氏方に訪問して面会し、次回には是非松尾組合へ来られたしと懇望せり。北原小石来訪。サホ子も亦同伴。発信 小木曾岩吉来訪し、百十七B預金を90%にて売ると話あり。

【語句の説明】①宮阪詰宗：一八八七～一九七三年。東筑摩郡坂北村（現・筑北村）の曹洞宗碩水寺の住職。東京帝国大学で宗教学を専攻し、各地で巡教・教化活動に従事するとともに、地元で方面委員、公民館長、教育委員などを務めて社会事業にも携わった。

三月七日 月曜

曇晴。暖気加り、蚊の如き小虫電燈の下に集まりウルサシ。

伊那町支店事務引継の為午前八時十四分八幡発出発す。関島よりバス持ち行く。併し復路のみに合ひたり。北原阿智之助と同車し伊那町迄行く。加納来り午後四時半迄かゝりて引継事務を済す。

委託倉庫を訪問して在庫品を見る。生糸の量一五〇〇斤繭五十石計りありたり。増田増蔵来行して其の訴訟費の請求あり、内入を約して四十円を払渡し十六円余を入金せしむる事に決裁す。神経衰弱の気味にて凝視すれば睡気を催し頭ボンヤリとなる。

午後七時半帰飯し福住を召して洋服の注文をなさんとす。

三月八日 火曜

〔記述なし〕

三月九日 水曜

晴。銀行へ出勤した。青山か風邪で横浜へ行かれんと云ふので予は江塚と遠山を連れて出浜する事として午後八時十四分夜行て八幡を出発した。此夜は春先としては寒い夜で辰野辺では寒中の様に思はれた。

銀行も本店整理の事やら相殺の事から種々の問題か混沌として出て来た。併し問題は却々思ふ様にははかとらなかつた。

老師を八幡駅へ迎へた。老師は昨年大病をして恢復したか去年は一回帰峽を中止した。午後六時龍門寺に老師と道友とを集めて会食の饗をうけて午後八時十四分発て江塚、遠山と共に横浜へ出発した。専務は風邪で行かなかつた。

三月十日 木曜

晴。夜は寒かつた。横浜でも大路の散水か凍つて居た。横浜は生糸貿易か不振の為に淋寒である。街頭に行き来る人も少ない。戦時の横浜貿易不振の地は不況を物語つて居る。朝七時カドヤ旅館に投宿し一浴して清々しくなり、奥村商店を訪問す。秀島の案内で生糸検査所に

行き廿一中の出荷に付検査の状況を見るに、総荷拝見六ヶ敷しくして荷を二口に分ちて検査する事となりたり。他の検査場を仔細に見物してワカナに於て昼食を饗せられて、午後三井物産を訪問し支店長井上氏に面会せり。次て新井金三郎に面会して帰り神栄を訪問せしに勝山常務〔専務〕取締役居りて彼の対米問題に關する説を聞く。啓肯〔肯綮〕に当り居りて面白し。米国人の理想国民なる事。各代の大統領皆理想家多き事。事実としては経済封鎖に出来ざるも生糸製品を着ざる事の決議を米女子かしないとも限らない。

鳥料理屋へ同伴せられ田代、小菅氏同伴せり。

【語句の説明】①奥村商店：奥村鹿太郎を代表とする輸出生糸問屋。

一九二〇年設立。横浜と神戸に拠点があつた。

②生糸検査所：国立の横浜生糸検査所。一八九六年業務開始。一九三二年一月一日、輸出生糸検査法が施行され、輸出向けの生糸は全て正量・品位について国の生糸検査所の検査を受けることが義務付けられた。品位検査には肉眼検査と器械検査があつたが、前者は各荷口の全部の生糸に対して行われた。

③支店長井上氏：井上治兵衛。一九三一年七月時点で三井物産取締役兼横浜支店長兼生糸部長。一九三五年二月、三井物産会長に就任。

④神栄：神栄生糸株式会社。一八八七年設立、本社は神戸。勝山は勝山勝司（一八七九―一九五九年）のこと。京都帝大卒業後日本郵船に入り、ニューヨークなどの各支店長を歴任した後退社。一九二五年から神栄に入り専務取締役（日記中の常務取締役は誤記）、三八年から社長、四一年から五四年まで会長を務めた。

三月十一日 金曜

晴。朝九時横浜を辞して帰京し江塚、遠山と泉岳寺に戦士の墓を展す。それから白木屋に入り見物す。上海事件の關係品多し（展覽）。

鈴木弁護士を訪問して原守国事件につき意見を問ひ又遺産相続の件に付ても意見を問ひて時間をとり、江塚と扮れ散し自ら三越を見物して後、小松茂治氏を訪問し信也の病氣の礼を述べたり。但し小松氏不在。新宿に來り夕食して午後十時半の汽車にて單身帰途に就く。

信陽舎に信也を訪問し彼が前田医師へ通院するの要なきに至りたる由及病氣其後の経過を聞く。

三月十二日 土曜

小雨。朝着飯、直に銀行にて仕事に従事す。二日休務したので仕事が多い。夕刻迄仕事して疲勞を医すべく帰宅せり。土産として龍門寺へ苺を贈り、父へも苺を土産として買來る。

三月十三日 日曜

〔記述なし〕

三月十四日 月曜

接心に入室して漸く四年来の「汝の精根を尽して持ち來れ」の公案を通過した。見解は言詮、難透難解の公案は幾度もやつてのけたが忘れ去つた。則ち世間体に云へは生命を賭して働けども少しも為にしな、と云ふ處であつた。之れは臨濟録の末節の重大なる公案である。老師は解を付け加へられた。和合茶札か九時から開かれて、出席して老師に五日間の鉗鎚を謝した。

【語句の説明】①言詮、難透難解の公案…「言詮」は禪の法理を言葉

で表現することを意味し、白隱慧鶴が整備した公案体系八段階のうち三段階目にあたる。「難透難解」は非常に難しく悟りがたいことを意味し、同じく四段階目にあたる。なお、「見解」は仏教用語で公案に対する答えのことを指す。

②臨濟録：臨濟宗の開祖である、禪僧臨濟義玄の言行を記した語録。主要な公案集の一つ。

三月十五日 火曜

晴。父と信也の床揚の計画を建てた。配給先の調査と其の品物を如何にすべきかに付ては家内中に相談した。鐘詰鮭を付ける事、赤飯を配る事、信也の分に対しては鳥（鶴）の子餅を付ける事、等を定め鳥（鶴）の子は千翁堂で買入れる事とした。其の品物の注文等に電話を以て交渉し、人足等もフサノと良一を頼む事等も決した。午前中龍門寺に接心の決算をなすべく出勤した。平栗と市村と三人で決算をした。老師の点検をうけた。併して本年は漸くにして僅十九円計りが残つたと報告した。

午後は龍門寺の浩然和尚の七回忌が催されたが、組合から迎に村長が来てとの事て組合に行つた。組合では村長と専務と予と三人で組合の将来、村との将来に就て話した。予の計画は工場を統一する事、（中央）付近の村の産繭を集中する事、器械繰糸は実現する事、干燥場を建てる事、村を工業地化する事、等を話して村長と了解を得る事とした。法要は終つてから龍門寺へ出た。併し老師と夕食を共にした。銀行へは小池が來たと云ふ様であつた。

三月十六日 水曜

晴。父の床揚と信也の床上と同時にすべく、今日は銀行も組合も欠勤する予定であつた。併し別に家に居ても何も用事がないので上飯し銀行へ午前十一時出勤した。久男と正の二人が飯田方面へ、尚夫は富田より小川へ、市場良一は毛賀から下久堅方面へ赤飯を配りに出向せしめ、耕地内、村内等をも配らしめた。始め計画した案は意外にはかどつて、今明両日を以て床揚げの祝が配る事が出来る事となつた。

赤飯一重と、信也の床揚は鳥〔鶴〕の子餅紅白70銭、50、30銭の三種として之を配る事とした。千翁堂へ注文してとりよせた。

南の道路が県の補助金と村の補助金及之を地元請負とによつて出来る事となり、組合より以東は、寺所分は鋤柄角太郎の地元請負88間、其余は全部森本猪佐雄が請負ふて工事に着手し、工事が始まつた。土工は伊久間の連中がうけた。

予記 ムラを下女として雇入た。

【語句の説明】千翁堂：飯田市主税町にある菓子店。

三月十七日 木曜

晴。朝組合支所へ行つた。中島の与一郎へ申込んだ下椽屋下の田へ土管を埋没する事の話に来訪する事を待つて居たが遂に来らず。組合に行けば柵田、下平等の二人の水引職工、銀行へ定預の払出を請求に来てウルサク付まつて居るので同伴して上飯し銀行へ出勤した。すると吉田組合の理事四名来行し居り昼食頃となるので東精軒に案内して昼食をおごり午後一時半帰行せり。東精軒にて池田愛泥、篠田宗一に会ふ。西洋料理を食した後胸やけて苦し。午後六時より仙寿楼に於て農商課長来飯を機として夕食会あり出席す。武島農商課長の所属するものは歓迎会に出で十六、七名のみなり。始めて同課長に会ふ。組

合の現業員会を開き置きたるに付、自動車にて支所に来り、同会に列し会議を見る。理事会廿日午後一時より開催する事として分れたり。二日間として父の床上の祝を配し終つた。銀行員へも鳥〔鶴〕の子餅二箇宛を配つた。

予記 床上の赤飯を川路、上伊那方面に配つた。老師の出版を八幡駅に午前五時に見送り接心残務を整理した。

【語句の説明】①池田愛泥：池田傳之助。長野県小諸町生まれ。早稲

田大学英文科卒業後、横浜毎朝新聞編輯局長、読売新聞主筆秘書兼一面編輯主任を経て、一九二五年六月に南信新聞の主筆に就任した。

②武島農商課長：武島一義。長野県内務部農商課長。

三月十八日 金曜

晴。朝武島農商課長が来行すると思ふて、午前九時に出勤した。商業会議所に於て染色織物の講習会終了式が行はれて、見物に行つた。山崎斌と云ふ小説家の織物先生が永い髪の毛のオールバックで芸術家の様な風をして居た。果して織物は農民芸術を見る様に思はれた。銀行へ中島の与一が来て、父か旧道を存して置け、廢道との切端の田畑は耕地で買ふて処分せよ等の申分は、森本としては勝手過る話だ、と云ふ事であつた。之れは昨夜父か与一郎を呼び付けて話した注文であつたらしい。与一郎も困つて話に来たのだ。農商課長の巨大な姿か午後放課後再び現れて頭取と打合せした。放課後武島課長を案内しておかん塚を見て、頭取は天龍峡に案内した。武島課長は織物の講習会と県下初巡視の為来郡したので。田中句一郎から明朝八時に支所で会見したいとの申込があつた。胸中常に平でない事は組合の専務の振舞と作興会の事業であつた。前者は常に青山か組合長の職を伺ひ居る事と作興

会事業の一般に感化を及ぼすの効の少い事であった。

予記 厚平かやつて来た。尚夫が山本から帰宅した。久男は山本へ帰った。

発信 福沢順一、催促（廿円）。三越。

社会の今日 臨時議会召集。

【語句の説明】①山崎斌：一八九二—一九七二年。長野県麻績村生まれ。旧制上田中学卒業後、作家として数々の作品を発表した。その

一方で、染織家としても活躍し「草木染」の命名者でもあった。

②おかん塚：松尾村にある前方後円墳。一九一四年、取り壊しの危機にあったが、吉川芳太郎が買い取り松尾村に寄付された。

三月十九日 土曜

晴。組合支所に田中句一郎に面会すべき約束となつて居たので支所へ行つた。今村与一郎に父から道路の既存分、椀屋阪に付て其の交渉の趣を話して、父の方針を（存置）ひるかへすべく話した。支所に田中句一郎氏と青山の退引（引退）問題に付て話した。青山の肚裡は組合長としての活動を希望して居るもの、如くなるも其の心持ちは少しも出さなかつた。肚裡を搜るべく次の案を田中から出したので予は一任した。青山は副組合長として組合長のなしつ、あつた外交の事務をなし、内部の仕事の中製糸部の仕事を全部江塚に一任する事、若し然らすとせは以前通りとなすか其一を選ふへし、として青山の肚を搜る事とした。其内に小菅か横浜から来訪したので其話中絶した。青山と田中の会談は如何に成行つたかは不明である。村会が午後一時からあつたので出席した。村会終了後上飯、銀行に出勤したか既に事務終了後、金田、原田、頭取と事務打合を行ふて帰つた。古本屋をひや

かして大慧書と元亨釈書等を見たが遂に買はなかつた。

発信 関肇、類焼見舞。

【語句の説明】大慧書と元亨釈書：大慧書とは大慧普覚禪師書のこと。

中国宋の大慧宗杲が門下の士大夫たちに禪の要旨を説き与えた書簡

文で二六編からなる。弟子の慧然と居士黄文昌（淨智）居士が集め、

一一六六年に開版した。元亨釈書は仏教伝来から鎌倉末期までを漢文体で記した仏教史書。虎関師鍊編、一三二二年成立。

三月二十日 日曜

晴、雪チラ／＼。午前中家居して室内の掃除をなし机上の堆積せる書類を整理す。

午後新道路を検し旁に組合に行けは椀屋父子出て来りて予に訴ふ。道路面をマセ口（馬畝口、屋号）の入口のみ低くして道路全体より見れば勾配を急にするのは不公平なり、依て貴殿の所有土地なれば何とか公平なる処置を乞ふ。依て予は曰く、公平なる道路を作る点より勾配を遠長してタルミを付けぬ様すべし、此点は充分頑強に主張すべし、告げて組合に行く。理事会を開き出張の報告より繭の市価決定、工場統一問題等につき研究して後、ミドリに於て一杯奢る。理事全部来り夕食ヌキにて一杯飲みたり。宴終りて菅沼、羽根と会見して島田井の井掛反別修正に付報告をうけて、島田井掛に付江塚善三、井深の兩人反対して、井掛を納付せざる事等を聞く。道路費請負費四千四百円余にて猪佐雄請負ひ、他の寺所分は鋤柄請負ひたり。依て耕地内に種々の問題惹起したり。中島の肚裡も不明なり。

発信 関肇、類焼見舞。

三月二十一日 月曜

晴風、雪チラ／＼。組合支所にて青山に面会して次の通りの談話をなす。「先般青山より申込の老令職に堪へざるに付、江塚氏を其後任として推薦に対し考慮したる結果、此際青山は絶対引退せざる事、江塚氏は製糸部の事業に限り全責任を負ひて仕事をしてもらふ事（相互通する事あるべし）、併して江塚氏に此仕事をなさしめんとするには徐々に引込むより外なし、兎に角青山の重荷の一端を負ふべく頼む事、江塚氏は之に付ては製糸部全体に付ての話ならば引受けてくれそうだと話し、結局青山と予か江塚に其旨を申込みて快諾を頼む事とせり。次に村長を招き込みて道路問題に付、太六かマセ口の入口の点にて道面低下し居るは全線道路の為に面白からずとの申込は正当なり、依て村長としても現在の測量を変更して旧道合致点より勾配をとる様せられたし。則ち椀屋阪は80mを以て1/25の勾配となしたるものを、120mとし（両方へ20m宛加へて）1/35とすべしと村長に予は話し、木下技師を招きて其話をなす。午後一時帰宅して木下作太郎と弁天道路潰れ地を見て帰宅。悠々自適するを得たり。今村太六道路に付ては奔走せり。

予記 停戦条約出来つゝあり。

三月二十二日 火曜

快晴、凍る。朝支所に行く。専務及江塚と会見し、江塚に昨日青山になしたる話と同様の話をなす。予は江塚に製糸部を専任としてやつてもらい度と申込みたり。青山も口を揃へて頼む様に乞ふ。江塚両三日考慮の余地を与へよと云ひて分れたり。信濃時事、大衆の記者来訪し、水神橋開通の祝銭を出せと云ふ。五十銭宛与へて去らしむ。午後

上飯出勤す。日本各地の銀行愈々不況となり、銀行に対する信用地に墜ち、預金は漸減し企業不起、片端より倒産するの状況にあり。竹村順一来行して凍豆腐模範工場の後始末に付て予に依頼する所ある。水引業者も営業状況か不利なるより組合に援助を頼み来れり。此点に付ても竹村より話ありたり。銀行にては伝馬町の不用品を行員間に払下話あり。小池氏よりは四圍の状況の愈々銀行業に不利なる事を述べ、八二Bの如きも不印の大なるものなる由を申来る。皆行者不安にかられつゝあり。竹下広吉戦時応召中なりしが、宇都宮より帰る。飯田駅頭に迎へて帰る。

【語句の説明】①信濃時事、大衆：信濃時事は信濃時事新聞を指す。

一九一五年八月創刊。下伊那民政倶楽部の機関紙で創刊以来非政友を標榜した。大衆新聞は信濃大衆新聞を指す。北原亀二ら政治研究会下伊那支部の幹部によつて、一九二四年九月創刊。労農党をはじめとする無産政党を支持する中間派の新聞。

②日本各地の銀行愈々不況：一九三〇年代初期、世界恐慌の影響を受け、地方銀行の破綻と統合が急速に進んでいた。この間、各地域においても普通銀行預金が大きく減少しており、一九三〇、三一年の二年間の平均減少率は一一パーセントに達し、特に三〇パーセント強の高い減少率だったのが山梨・長野・岐阜の三県だった。これは、同地域における蚕糸業の不振の影響を強く受けたことが最大の理由であった。

三月二十三日 水曜

晴。直に銀行へ出勤した。頭取は欠勤した。各銀行共預金減と金融の梗塞、信用の破毀に青息吐息、四苦八苦をして居る。幸か不幸か此

の苦みは既に通り越した。県下一行主義の説もあつたが、実現は何時頃か明でない。午後一時半本所に移つた。凍豆腐組合の代田、農会副会長木下、文化凍豆腐の今村大源治を呼びよせて、竹村順一が凍豆腐の副業を此村に植付けるに付て私財を提供して苦しんだ事に同情をしてやれと主張して其賛成を求めた。以上三人も之を諒として去つた。小学校に夜七時から補習学校の卒業式があつた。予も参列して一場の祝詞として「苦学の効を説いた。則ち補習学校が苦学である事を挙げ、又組合と補習学校をやれば高女に優ると云ふた。組合支所に井深、田中、清水の送別会があつた。出席した。水神橋の開通式を祝ふと云ふて信濃時事や大衆の記者が来た。

松島藤太郎を呼びよせて整理田へ水をつける事、三年間の小作不納を百六十円を評価し組入方の証書提出を促した。

社会の今日 臨時議会終了。臨時費。

【語句の説明】①凍豆腐組合：一九二二年に長野県が副業奨励方針を打ち出したことを契機に、同県全域に続々と凍豆腐製造組合が設立された。二四年には全県の連合組合である長野県凍豆腐業組合連合会が組織され、競争力の強化が図られた。松尾村凍豆腐組合は長野県でも初期に結成され、豆腐の製造・共同販売を行った。また、竹村順一組合長の主導で模範工場が設置され、組合員への技術講習を盛んに行い、松尾式の製造技術は業界でも高い評価を得ていた。

②文化凍豆腐：松尾村凍豆腐組合所属の中村円次郎が発明した高野豆腐の一種。一九二五年に特許権取得、後に長野県凍豆腐業組合連合会に使用権を委譲した。澱粉の混入によって従来の高野豆腐より舌触りが改善され市場では好評を博し、全盛期には長野県下で百十六の文化豆腐工場が存在した。ただし、貯蔵中変味を来すという欠点

もあつたため、一九三〇年ごろから次第に衰退していった。

三月二十四日 木曜

晴。組合支所で青山、江塚と事務の打合をした。毛賀の水道（次郎井）開通式には青山を代参せしめた。製糸部工女の新人生に付ても種々試験に付て考慮した。繭の産額が生糸安の為に減する事は予想にかたからずた。青山は三割減を見て居た。此の不況時代に工場を統一すると云ふ様な事も考へものであつた。午前十時半出勤した。齒か痛んだ。頭かボートして何も考慮する事は出来なかつた。吉田の宮島組合長が来た。預金の保全のために債権を持つて行つた。預金支払の期限を付けるべく交渉があつたが応しなかつた。銀行にては伝馬町から移つた什器の不要品を売却した。予も書柵<sup>ツツ</sup>其他二点を入札した。

信也が帰宅した。父母等は皆喜んだ。下伊那出身の成功者の月旦も面白く聞いた。

道路問題に付て太六が正論を唱へて、マセ口の入口の処を床上げにて勾配をぬく事に決して遂に自発的にすると云ふ事で遂に出来る事となつた。

【語句の説明】毛賀の水道（次郎井）：次郎井は毛賀村に古くからある井戸で、一六六八年に竣工した。

三月二十五日 金曜

晴、夜小雨。夜中小雨が降つた。四囲の山々は雪であつた。伊賀良支店の検査があるので朝七時半に出た。春陽の気みなきり肌吹く風も暖であつた。午前八時飯田発で吉川書記と共に伊賀良支店に向ふた。午後から用事があるので大体の方針と貸付の延滞ものにつて整理方針

を定めて支店長に注意して置いた。則ち此際信用は入担し（担保不足も）債権を確保する事、相殺は相当な事、不良貸付に付て特に然り、困難なるものに付ては訴訟により解決し債権確定し置く事、等を支店長に告ぐ。午後帰りて組合支所て同栄会に出席す。然して席上組合経営に付て講演の注文に応じて一席弁す。則ち精神的方面に付ては報徳主義を加味する事、仏教主義、事業の大事特に信用部の仕事の難事業たる事、成るべく組合員の当座の経済より将来永遠の福利を考ふる事、等を述べたり。直に再上飯し警察署に工場懇談会役員会に列す。七年度予算、六年度決算あり。後仙寿楼に於て署長、小松警部補、部長等と懇親会を催す。

予記 勤労党では中谷氏を招き若松座に演舌会あり出席せず。

山口福治より水道を引いてくれと頼まれたり。銀行に呼びよせて引込の五割の費用を負担する事を約す。

### 三月二十六日 土曜

快晴。朝七時半に出発して飯田から駒場へ自動車に乗る。日暖で無風、陽春の地の臭がする。乗客も冬籠の中から出て来た様で元気にも見える。午前九時に駒場支店着、吉川、石川と検査にかゝる。検査は炬燵で帳簿を開いて主に貸付金に関して吉川と共に研究旁に各口に付き検査し、今後の整理方針に付て打合をなす。石川は他の預金に付て検査す。午後五時頃終了して飯田よりタクシーを雇いて阿智川に沿いて上り、夜鳥山林及オン出し山林を見る。太田の所有にて銀行へ入担し居るものなり。依て其価値を評価する。薪炭林にて意外に面積大ならず。自動車は花崗岩の崩れたるザクザク道を走る絶壁の上、急端ののぞきつ、蛇々の道を守る心地よからず。自動車を捨て、山容を見るに、

春浅ければ未だ浦山つゝ、じも咲かず、山は淋寒として谷は深くよき心地なり。清内路の人家山腹に点々たるを見て帰る。直に駒場支店より飯田一宅に付て午後七時半なり。終日の検査にて疲労せり。

予記 鈴木、内務大臣となり。

受信 小林洋吉。所得税の事を頼まる。

【語句の説明】内務大臣：犬養内閣の内務大臣中橋徳五郎が病気で辞任し、三月二五日に鈴木喜三郎が内相に就任した。

### 三月二十七日 日曜

曇、小雨。片桐支店の検査として朝七時半出かく。金田、石川を同伴す。伊那田島にて下車、山を下る。老林杉々たる山地快よろし。支店にては庚子銀行より譲受けたるもの未だ整理充分ならず、元島の前支店長は不適任なるものを永く此地に駐めたり。今にして往古を懐へは手ヌルカリし事限りなし。午後四時迄に貸付の整理方針等一件毎に詳しく研究して、結論として藤瀬支店長をして厳敷請求せしむる事とし、事件によりては出訴せしむる事としたり。将来を期して午後四時辞して元の山地を踏みて帰る。山路を登れば天龍河上は霧こめて、赤石山は雲に鎖れたり。高原気分とする伊那田島駅に暫し休みて午後六時帰宅せり。犬塚、不在宅に來訪して預金を買ひ来りて借金と相殺せん事を申出す。又明日の水神橋開通式に來られん事を役場より申來れり。

両三日の検査にて稍疲労の色あり。

発信 小林洋吉。

【語句の説明】元島の前支店長：本島愛三郎のこと。前百十七銀行片桐支店長。

三月二十八日 月曜

雨。風雨強く寒し。近隣の山は雪なり。午前八時より清水橋詰に出頭せよとの村会議員の召集に、急に予定を変更して市田支店行の予定を変し（父の命による）水神橋開通式に参列する事とせり。支所にて青山と話して資金の行詰まりに青山も青息吐息の状態なり。然し事艱にして表る、丈夫の心である難局に際して逃げ出す如きものは共に与せずと厳として彼の弱音に同せず此際勇気をはげます。午前九時雨を衝いて水神橋に至れば橋前の道路に天幕をはり祭壇を設けて松材其他を借入れ消防組も出頭して事務に服し居れり。生憎の雨天にて午前十時の挙式は十二時となりて始まる。村議員は接待役たり。地元清水のもの大に努力す。橋は工費二十二万余を投して五年十月より起工し今日之を竣工せり。近代式の壮麗なる橋にて此地方としては贅沢なるものなり。西洋式の鉄橋、田舎には過ぎたり。式は大平祭主により始められ、式後此橋を渡る。北原阿智之助と共に帰り、予は本所に立寄りて中央金庫より借入るべき四万円の手形を持ち上飯し、信聯に出頭し松沢に会いて借替して購聯を訪い中田に会ふ。松沢、世界を達観すなと法ラ〔螺〕を吹けり。心竈におかし。

発信 小林洋吉。所得税の軽減依頼に対し極力ヤルと申送る。

【語句の説明】①水神橋：松尾村と下久堅村を結ぶ、天竜川上の橋。

一九〇九年四月に木造橋として一度完成しているが、同年九月の大洪水で橋脚の一部が破損し、応急的に仮橋が作られた。一九二八年に交通機関の発達と交通量の増加のため、県会は鉄骨橋への架け替え工事を可決し、三〇年一一起工、三二年三月完成した。この日下久堅・松尾両村合同による開通式が水神祠の松林で執り行われた。

三月二十九日 火曜

吹雪。八幡支店検査にて八幡支店行。井村支店長の廿分遅れたるを詰る。近來ケンカ腰となり居りてよろしからず。午後三時迄検査して重役会に列すべく上飯す。頭取四五日来病氣欠勤したりしが出勤し来りたり。重役会には予より種々話す。頭取、予の数字をチヨイ／＼口を出して訂正するは心にくし。小池氏も山口氏も来行せり。一般財界の極端なる不況より金の欠乏せる事等を話して近來の金融状況の迫れるを談し当行の模様等につきても予は話せり。重役会後吉川芳太郎に綿半の債権は如何にするかと問ひしに、結局は消込を辞せずとの返答あり。依て肚を決して徹底的にやる事とせり。犬塚の女八幡支店に来行し彼是口走りて行く。吉野、座光寺の兩人来訪して予に猶興社の口を持ちて出金を迫る。予は毎月十円宛出して責を達せんと云ひ、五十円を心配せられたしとの事に、然らば来月十日迄に若干を作る様試みんと述べたり。

【語句の説明】猶興社：一九二九年、森本州平や中原謹司らが結成。

一九三一年、愛国勤労党南信支部に発展した。

三月三十日 水曜

吹雪。下条支店へ検査の為吉川、石川を連れて出張した。検査は午前九時から午後四時迄執行した。事務の整理（貸付金の）かよく出来て居ない事に付て行員を三名置く事も之か整理の為であると付加へた。自動車は百折の山路を喘きつ、登り下つた。数年振りて下条の支店及下条地方を見物した。帰途姫城温泉迄帰り石川、吉川と共に慰労の宴を張つた。午後十時酔ふて帰宅した。産業組合の事も作興会の事も頭から去つて専念に検査を執行する事か出来た。

作興会の事や国民精神の弛緩に付ては深夜考へると眠られん事が屢々あつた。殊に作興会を如何にして実効を挙げて行くかと云ふ事に付ては六ヶ敷い事であつた。

飯田はおねり祭にて仕度か出来た。店頭装飾等に付ても紅白の柱か建てられ七五三か張られた。

受信 丸山義一

【語句の説明】おねり祭：大宮諏訪神社の式年祭礼（御柱祭）に際して開催される祭り、大勢の人が町を練り歩くことからこのように呼称される。一七一六年から盛大に行われるようになった。

三月三十一日 木曜

晴。マツがムラの給金を定めてくれと云ふて来たので年額八五円と決してやつた。又時貸として給料中へ金二円を貸与へた。菊太郎の家は松島孫一の田を二七〇坪を買ひ（坪金二円）とり、尚借地の一反歩を孫一に与へて売買契約出来、山の部に居宅を建設する事とした。

朝十時迄家族中にて種々話し合ひ、信也と父と三人にて父の財産を信也に売買譲渡する事を信也に告げ、猶信也をして実印を調製せしむる事に付て話した。然る後上飯した。聯合事務所下田と作興会に關して東京の太田耕造氏に本多熊太郎氏招聘を頼む事、加藤寛治氏に來講を頼む事、映画教育はフィルムを東日より借りてする事を命じた。久保田に会ふて産組の資金欠乏の事に付て密談した。福住へ一寸立寄た。洋服は届けると云ふて居た。銀行へは午後一時出勤した。頭取は午後來行した。飯田を引揚けると云ふて居た。組合本所へ歸つた。青年と膝を交へて組合の事に付て話した。小学校裁縫室に青年の為に組合の経営方針（世界一の組合にする事）組合精神に付て述べた。青山

専務も同行した。

社会の今日 上海停戦會議、雲行六ヶ敷。

【語句の説明】加藤寛治：加藤完治（一八八四～一九六七年）のこと

か。東京帝国大学農科大学卒業後、水戸の農業訓練所長、山形県立自治講習所長などを経て、日本国民高等学校を設立した。満州事變後は満蒙開拓青少年義勇軍設立に關与し、満蒙開拓移民を推進した。